

リーザの蒼白い頬には晴かなきままり悪さうな微笑が上つた。眼にまで微笑が含まれた——たつた今まであんな事を云つて、對手を怒らしたのだと思ふ氣遣はしさがリーザの胸にあつたのだ。

『ウラヂーミル・ニコラーウイチさんも一緒に行らしても好いでせうね』とマリヤ・デミトリエヅナが訊ねた。

『ええ』とラヴレッツキーは答へたが、『ですが、御家内中だけの方が却て好くはないでせうか』

『さあ、ね、然うかも知れません』とマリヤ・デミトリエヅナは云つては見たが、『いえ、そりや何方でも貴方の方の御都合で』と云足した。

レーノチカとシユーロチカも連れて行くと云ふ事に定つた。マルファ・チモフエーヅナは一行に加はるのを断つた。

『妾には難しい事だよ、ねえ』と彼女は云つた。『何を云つても此の老骨ではねえ。』

第一お前さんの家では妾の臥るやうな所は無からうし、それに一體、妾は床が變つては眠れない質なんだから、まあ若い人達だけで、呑氣に行つて來るが好からうよ』

ラヴレッツキーはリーザと二人限りで居る機會は重ねて得なかつた。が、それでも對手を喜ばせたり、差ませたり、又此方を氣の毒がらせたりするやうな眼付で、其の顔を繁く眺めた。別れる時、情の籠つた握手をした。一人跡に残つてリーザは物思ひに沈んだ。

二十五

ラヴレッツキーが家へ歸つて見ると、容間の戸口の所に丈の高い、瘦せた男が居た。糸目の見える青い上着を着て居る。顔は皺が寄つて居るが如何にも快活さうで、斑白の鬚を蓬々と生して居る。鼻筋は長く通り、眼は小さくて光つて居

る。此の男は大學で友達であつたかのミハレーヴィチだ。ラヴレツキは初めは誰だか分らなかつたが、名を明すが早いか直に情を籠めて抱着いた。二人はモスクワ以來ずっと會はなかつたのだ。様々な感嘆の言葉や、疑問の言葉が盛に取交された。久しく葬られて居た追懐が明るみへ持出された。氣が氣でないと言ふやうな風で、煙草を幾服もく吸つたり、茶をがぶく飲んだり、長い手で盛に身振をしたりして、ミハレーヴィチはラヴレツキに自分の冒險を語つた。別に氣を引立たす程な事も無く、又成功を誇るやうな事も彼には出来なかつたが、併し彼は絶えず斂枯れた神經質の笑ひを續けて居た。彼は二月程前にQ市から二百五十哩離れた土地の、酒稅徵集請負人の帳場に務める事となつたのだが、ラヴレツキが外國から歸つたと云ふ事を聞いて、舊友に會ひたいばかりに途中から此方へやつて來たのだ。ミハレーヴィチは若い時分と同じく熱烈に談じた。話の騒々しい點も、無暗に熱する點も以前とは變らない。ラヴレツ

キーの方でも自分の境遇を話さうとしたが、ミハレーヴィチはそれを遮つて慌しげに呟いた。

「僕は聞いたよ。君、聞いたよ——實に豫想外だつたねえ」
斯云つたゞけで直に、彼は話を尋常の事柄の上へ轉じた。

「僕は明日立たにやならんのだよ。君」と彼は云つて、「今日若し君が差支へないならば、長起きして談したいんだ。何よりも先づ僕は、君の目下の有様を知りたいんだ。君は何んな考へを持つてるか、何んな信念を持つてるか、何んなに變つたか、人生は如何なる事を君に教へたか。それを話して貰ひたいんだ」

(ミハレーヴィチは相變らず一八三〇年代の語法を保存して居る。)

「僕と來ては、大變な變り方をしたよ。人生の波は僕の胸を洗ひ去つた——誰やらもそんな事を云つたツけね——だが重要な點、竟り本當の中身に於ては、僕は變りやしないよ。僕は以前と同じやうに善を信じ、眞を信じて居る。だが、單に

それは信ずると云ふだけで無く、今では慥かに信仰となつて居る。僕には少しも動く事の無い信仰が出来たんだ。ね、君も知つて居るだらう。僕は詩を書く。だが、其の詩の中にあるものは所謂詩では無い、真理なのだ。最近の作を一つ讀んで見やう。僕の最も眞實な信仰が歌つてあるんだ。聞き給へ」

斯云つてミハレーヴィチは、自作の詩を讀出した。仲々長い詩で、最後は次のやうな數行で終つて居る。

「我は心を傾けて新しき感情の人となりぬ、
斯くて我心全く赤兒の如し。
我は崇め來し凡てを燒盡したり。
而も我は今、燒きたる凡てを崇む。

最後の二行に至つてミハレーヴィチは涙にくれた。微かな瘰癧——深い情緒の印である——微かな瘰癧が彼の大きな口に動いた。彼の醜い顔は華いた。ラツレツキーは一心にそれを傾聴した。烈しい苦悶が彼の心に起つた。モスクワの

學生、何時でも事あらば動き出しさうな、毎でも沸騰點まで騰つて居る情熱は、彼の心を妙に苛立たせた。ものゝ十五分と話もしない中に、二人の間には最う熱烈な議論が起つた。それはロシア人でなければ出来ぬ果てしの無い議論の一つであつた。多年別れくになつて、二つの異つた世界を辿つて居た上に、お互に對手の思想は勿論、自分の思想にすら明確な理解が無く、唯徒らに言葉の交換をして、二人は極めて抽象的な問題に就いて論じ合つた。恰も生死の問題であるが如く、それ等の抽象的な事柄を論じ合つた。家中の者が皆驚いて飛上る程な大きな聲で怒鳴つた。ミハレーヴィチが來ると、直に自分の部屋へ閉籠つて了つた哀れなレムは、二人の議論には當惑して、何だか薄氣味悪くなつて來た。

「結局君は何だ。厭世家か」と夜の一時にミハレーヴィチは叫んだ。

「厭世家と云ふものは普通こんな者かね」とラツレツキーは答へた。「厭世家と云ふ奴は、大概色の蒼白い病人染みたもんぢやないかね——所が僕は、お望

みなら片手で君を差上げるぐらゐは行るよ」

「ぢや君は、厭世家でないなら懷疑家だ。其方が尙悪い」ミハレーヴィチの話には、彼の母國たる小ロシア臭い所が多い。「所で君には、懷疑家たる資格はあるかね、君は成程失意の生涯を経て來た。それは僕等も認める。だが、それは君の過失ではなかつたんだ。君は天性熱烈な愛情を持つて居た。それで居ながら君は、無理に女の社會から遠けられて居た。君が初めて突當つた女が、君を欺すやうになるのは無理の無いこつた」

「彼奴は君をも欺いたんだよ」とラヴレツキーは顔を顰めて云つた。

「然う〜。僕はあの事では運命の手先に使はれてたんだ——運命だなんて僕も馬鹿な事を云つたもんだ——運命なんてものはありやしない。そんな事は、不正確に物を云ふ古い習慣に過ぎん。それにしても何云ふ事からあんな事になつたんだらう」

「そりや竟り、僕が子供の時分から偏した育て方をしられて居たからさ」

「ぢやまあ、君自ら眞直になるが好いんだ。一個の人たり、男性の動物たるには是非とも然うならなくちやならん。それは然うとして、一個の個人的な事實を、竟り一般の法則、不易の原則に還元する事は出來る事だらうか。それは赦し得る事だらうか」

「何んな法則にさ？」と對手の言葉を遮つてラヴレツキーが云つた、「僕には承認は出來ん。然云ふ——」

「いや、そりや君の原則さ、君の原則の事だよ」とミハレーヴィチは反對に對手の言葉を遮つた。

「君は利己主義者だ。それに違ひ無いんだ」

と一時間程してからミハレーヴィチは大聲で怒鳴つた。「君の欲する所のものは個人的な幸福だ、生の享樂だ、自分の爲めのみに活きる事だ」

『個人的幸福つて何んな意味だね』

『あらゆる物が君を欺いたんだ。あらゆる物が君の脚下に碎けたんだ』

『おい、個人的幸福つて何んな意味だね、君』

『碎けざるを得なかつたんだ。君は見出す事の出来ない所に助けを求めて居たんだ。君は浮砂の上に家を建てたんだ。それから——』

『最少し平易に云つて下れ給へ、それでないかと僕には分らない』

『それから——笑ひたければ笑ふが好いさ——それから君には何の信仰も、何の温情も無い。理知——鏝一文の価値も無いやうな理知が何になる……君は眞實哀れむべき、時代後れのヴォルテリアンだ。それに最う違ひ無いよ』

『僕がヴォルテリアンだつて？』

『然うさ、君の親父のやうにだ。君は自らそれを不思議に思つては居ないんだ』
『ぢや結局』とラヴレッキは叫んだ。

『僕の方からも君を、狂信家と云つても差支へ無い譯だね』

『あゝあ』とミハレーグイチは悲しさうな調子で云つて、『僕にや不幸にしてそんな偉い稱號を辱うする價值が無いよ』

『辛と僕は、君を呼ぶに適當な言葉を見附けたよ』とミハレーグイチが叫んだ
其時は最う朝の三時であつた。『君は懷疑家でもなければ厭世家でもなく、ヴォルテリアンでもない。君はのらくら者だ。而も悪いのらくら者だ。自覺のあるのらくら者だ。單純なのらくら者ではない。唯ののらくら者だと、煖爐の傍に寐て何もする事を知らないから何にもしないで居る。其代り又何も考へはしない。所が君は頭の人間だ。それで居て煖爐の傍に寐て居る。何か出来る人間だ——それで居て何にも爲さない。腹一杯食ひ、何も爲すに寝て、上の方から見下してはこんな事を云つて居るんだ。』斯うやつて何も爲すに寝て居るに限る。人間のする事は皆充らない、結局は無駄な事なんだから』

「君は何から推論して僕を何も爲さないで寝て居る人間だと云ふんだね」とラヴレツキーは強硬に言放つた。「何故君は、そんな概念を僕に食付けるんだ」

「それから君等の種族は總じて」とミハレーヴィッチは、對手の話も耳に入れずに前の話を續ける。「教育のあるのらくら者だ。ドイツ人は何方の足を跛引くかと云ふ事も知つて居る。イギリス人やフランス人に何んな缺點のあるかも知つて居る。で、君等の哀れむべき教養が、だん／＼悪い方へ君等を引張つて行く。君等の恥づべき怠惰、君等の憎むべき無活動は、教育あるが爲めに自ら是認されるやうになる。甚しきはそれを誇として居るものすらある。「俺は利巧な人間なんだ。俺は何も爲ないで居るのに、浮世の馬鹿共はこせ／＼働いて居る」そんな事まで云ふのだ。そりや勿論吾々の中には立派な紳士も居るさ——僕は君の引合にそれを出す譯ぢやないがね——兎に角倦怠の結果恰で痲痺したやうな状態に陥り終にはそれに慣れて了つて、恰で——恰で鹽漬の菌みたいな生涯を送つて居る、

然云ふ立派な紳士が居るんだ」ミハレーヴィッチは急込んで云つて、自分の試みた比較に自分で笑ひこけた。「それだ、其の倦怠の痲痺状態がロシアの破滅なんだ。我國は今や働くべき時なんだ。そしてかの忌しいのらくら者は……」

「だが、結局君は何を罵るんだ」と今度はラヴレツキーの方から叫んだ。「働くとか仕事を爲るとか君は云ふが、徒らにそんな事を云つて僕を罵るよりは、働くべき事の何であるかを云つた方が可いぢやないか。おい、ホルタワのデモスゼネス先生」

「それ、そんな事を訊く！僕は君、それまで云へないよ。それは各々自分で知らにやならん事だ」とデモスゼネス先生は反語的に云つて、「地主とも貴族ともあらうものが、自分の爲すべき事を知らん？そりや君に信念と云ふものが無いからだ。若しあれば自分の爲すべき事ぐらゐ知つてる筈だ。信念が無い、従つて發見する所も無いんだ」

「まあ兎に角、僕に息を吐く隙を與へてくれ。君は周圍を見廻す隙をさへ僕に與へないんだもの」とラヴレッスキーは頼むやうに云つた。

「一分も一秒も！」とミハレーヴィチは手を傲然と振つて、「唯の一秒たりとも待てない。死は延ばす譯には行かぬ。生とても同様延ばすやうな事はあつてならぬのだ」

「而も、何時、何處で、人が怠ける事なんか考へるやうになつたと思つて見給へ」彼がこんな事を叫んだのは最う朝の四時であつた。そして其聲には眠くなつたやうな調子が十分に讀めた。「それが現在吾々の間で！今！ロシアでだ！各自の個々人の上に義務——神に對し、人々に對し、自分自身に對して、嚴肅な責任が置かれて居る此のロシアでだ。吾々は皆眠つて居る、時がどしどし過去つて行く、吾々はそれでも眠つて居る……」

「一寸待つて下れ給へ」とラヴレッスキーは言葉を擽んで、「僕等は現在眠つて

は居ないのだ。却て人の眠るのを妨げてゐるんだ。僕等は鶏のやうに喉を突張つてゐる——ほら、ね、最う三番鶏が鳴いてる」

此諧謔はミハレーヴィチを笑はせて、氣を鎮めさせた。

「左様なら。明日又」斯う笑顔で云つて、彼はパイプを囊に收めた。

「何れ明日又」とラヴレッスキーも同じ言葉を返した。が、二人の友はそれから未だ一時間以上も談して居た。二人の聲は最早や以前の様には騰らなかつた。静かなしんみりした話が二人の間に取交された。

其の翌日、ラヴレッスキーが一生懸命になつて引留めたにも拘らず、ミハレーヴィチは出發した。ラヴレッスキーは彼を引留める事は出来なかつたが、併し心行くまで語つた。

ミハレーヴィチは一文無しであるらしかつた。ラヴレッスキーは前夜既に、貧窮の幾年を経て來たらしい友の様子を氣付いて、心密かに苦しく思つて居たのだ

靴はぼろ／＼になつて居るし、上着の背中の釦が一つ取れて居るし、手は手袋を
箆めた事も無さうではあるし、それに髪は梳した事も無いやうに亂れて居る。
着いた時に顔を洗はせて下れるやうに頼まうと云ふ考すら無かつた。夕飯には恰
で饑かなんぞのやうに食つた。指で肉を裂き、丈夫な黒い齒で骨を噛んだ。彼は
今迄の職務から何等の蓄へも得なかつたらしく、今は唯、偏に事務所へ「教育あ
る人物」を入れたいと云ふ目的から、自分を雇つて下れる收税請負人を頼みに思
つて居る。兎に角種々な事があつたにも拘らず、彼は些しも意氣沮喪せず、一個
の理想家として又皮肉家として貧しい生活に甘んじて居る。人間の運命や自己の
天職の爲めに悲喜して、如何にして餓死する事を免れやうかなどは、大して思
ひ煩つて居ない。

ミハレーヴィチは結婚はしなかつたが、數限りなく戀に陥つた。そして自分の
戀の對手に詩を作つては贈つた。就中彼は或る不思議な、髪の黒い「ポーランド

産の貴婦人」の爲めに、非常な熱度を以て讚美の歌を唄つた。所が實際は此「ポ
ーランドの貴婦人」と云ふのが、多くの騎兵士官によく知られて居るユデア人の
女に違ひ無いと居ふ噂があつた。併し竟る所、そんな事は何方にしても大した相
違が無かつた。

ミハレーヴィチはレムと好く氣が合はなかつた。彼の騒々しい話聲と、粗笨
な態度とは、然云ふ振舞に慣れないドイツ人を酷く驚かした。不幸な人間が會ふ
と直にお互に相知るのが自然だが、年を取ると交つて見たくなるやうな事が殆ん
ど無くなるものだ。それも不思議な事は無い。お互に頼ち合ふ物と云つては、希
望すらも無いのだから。

出發する前にミハレーヴィチは又もや長い議論を行つた。彼はラヴレッツ
キーにして、若しも自分の過を知るの明が無ければ、屹度破戒に終ると云ふ事
を豫言し、小作人の爲めに眞面目に身を委ねて働くやうに勸告し、更に自分を引

合に出して、自分の如きは困難と云ふ坩堝の中で清められた人間だと云つた。そして然言ふ言葉の下から、幾度も幾度も自分を幸福な人間だと云つた。彼は自分を空の鳥に比べ、野の百合に比べた。

『結局、黒い百合さね』とラヴレッキは云つた。

『おい君、紳士氣取するのは止し給へよ』と上機嫌でミハレーグイチは云つて『だが併し、君の身體には純粹な平民の血が廻つて居るんだから、それを寧ろ神に謝せにやならん。それにしても、君は慥かに其の無感情の狀態から逃出る爲めには、何か斯う清い、無垢な人間が必要だね』

『有難う』とラヴレッキは云つて、『然云ふ神聖な人間は僕は最う十分だよ』

『皮肉家先生、文句云ふのは止せ』とミハレーグイチは叫んだ。

『皮肉家だ？』

『然うさ、皮肉家さ』とミハレーグイチは恥づる色も無く同じ言葉を繰返した

馬車に乗り、平べたい、黄色な、氣味の悪い程軽い靴を持込んだ其際まで彼は喋舌つて居た。スペイン風の外套に包まり、古くなつて鳶色をした襟を附け、フツクの代に二つの獅子爪で前を留めた。彼は相變らずロシアの國運觀を滔々と述續けて、恰も其の未來の繁榮の種を蒔やうな風に、彼は眞黒な手を空に振つた。やがて馬は駈出した。

『僕の最後の三つの言葉を覚えて居て下れ』馬車から全身を伸出すやうにして彼は叫んだ。『宗教、進歩、人道……此の三つだ……左様なら』

目深に冠つた秣刈のやうな彼の帽子も見えなくなつた。ラヴレッキは唯獨り後に残つて入口の階段に立つて居た。そして馬車が見えなくなるまで、凝として道の續く限りを見送つた。

『結局、或はあの男の方が正しいのかも知れん』家の中へ入つた時に斯う彼は思つた。『俺は或はのらくら者なのかも知れん』ミハレーグイチの言葉の多くが、

何んなに其の人を斥けても、間違つて居ると思つて見ても、避難く彼の胸に沁込んだ。心の正直な者には何人も敵はないのだ。

二十六

二日の後マリヤ・デミトリエヴナは、約束通り若い者を皆連れて、ワシリエヴスコを訪れた。娘共は直に庭へ駆け出したが、マリヤ・デミトリエヴナは物倦さうに部屋々々を廻り歩き、何かにつけて物倦さうな譽めやうをした。自分では斯うやつてラヴレツキーを訪ねて来た事を、ひどく自らを卑下した事だ、それ所か慈悲の行だとも思つて居る。アントンとアブラクシャが出て来て古風の召使式に彼女の手に接吻すると、こちらは容態ぶつた笑顔をし、鼻にかゝる弱々しい聲で茶を飲ませてくれると求めた。アントンはその事があらうと思つて、豫め編んだ白い手袋をはめて居たのだが、それにも拘らず困つた事には、其の貴婦人

客への茶の給仕はラヴレツキーの備僕がつとめる事となつた。その男はアントン爺の云ふ所では殆んど禮儀の心得がないのだ。そこで午餐の時にはその役目の權利をアントンは自分の方へ取り返して務める事とした。彼はマリヤ・デミトリエヴナの椅子の後に不動の位置を保つて、何人にもその地位を譲らなかつた。永年の間打ち絶えて此のワシリエヴスコの屋敷に見られなかつた客の來訪は爺さんの氣をそわつかせ、喜ばせた。自分の主人が斯う云ふ立派な方々と知合であると云ふ事を見るのが、爺さんには一種の愉快であつた。だが、その日にそわつたのは獨アントンのみではなかつた。レムも亦胸騒がせた一人であつた。彼は心持短い、嗅煙草色の燕尾服を着て、窮屈さうに頸巻を巻き、絶えず咳を爲續けて、いかにも丁寧な愛想の好い風をして客をもてなして居た。ラヴレツスキーはリーザとの仲がだんく親密になるのを認め得て喜んだ。家へ入つて來ると直にリーザは懐しさうに手を出して握手を彼に求めたのだ。午餐が済むとレムは、始終

氣にして手を突込んで探つて居た上衣の後、襪から、小さく巻いた楽譜を取り出し、口をキュッと窄めて、その楽譜を黙つてピアノの上に置いた。それはドイツの古語を用ひて、昨夜彼が作つた歌で、星に寄せて思を述べたものだ。リーザは直にピアノに向つてその歌を見て弾いた。……だが悲しい事には、曲はだんだんこんがらかつて、調子がいかにも苦しいものとなつた。作者が何か知らず情熱的な深い味のあるものを現はさうと努めた事は明らかだが、併しそれからは何ものも出て來なかつた。努力は單に努力で、それ以外何物もなかつた。ラヴレッスキーも、リーザも、この事を感じていたが、作者たるレム自身にはそれは解らなかつた。一言も口を利かずに、彼は自分の歌を衣囊の中へしまひ込んでしまつた。そしてリーザが今一度弾かうと云ひ出したのにも、たゞ首を振つて「もう十分です！」と意味ありげに云つたので、妙に身體を縮めて其の場を外してしまつた。

夕方になつて、一同は魚を釣りに出掛けた。庭の裏の池には、鯉や水底に棲む

魚の種類が澤山居た。マリヤ・デミトリエヴナは岸に近い木陰に据ゑた脇掛椅子に身を寄せ、足の下には毛氈を敷いた。釣糸も一番良いのが當てがはれた。アン-tonは釣の老練家として、夫人の傍でその役目をしやうと申し出た。彼は熱心に虫を針につけ、それを掌で叩き、唾を吹きかけ、いかにも儀式張つた格好で全身を前へ動かして糸を水の中へ投げる事までやつた。マリヤ・デミトリエヴナは其の日フエードル・イワーニチに向つて、學校仕込みらしい消化れないフランス語で、アントン爺さんの事をこんな風に話した。「イル ニイ ア プリュエ マントナン ド セ ジヤン コム サ、コム オートルフォア」(あんな昔風の人は)

レムは二人の娘を連れて、池の堰の方まで行つた。ラヴレッスキーはリーザの傍へ行つて座を占めた。魚は絶え間なく繫つた。鯉は釣り上げられると、金色に又金色に腹を光らせては、高く空中に跳ねた。小さい娘共の歡聲は絶えず聞かれた。マリヤ・デミトリエヴナさへ二三度細い女らしい叫聲を發した。ラヴレッキ

「とリーザの捕つた魚は最も少なかった。二人は多分他の人達よりは、釣に氣を
入れ方が少なかった爲めに、浮標を引かれても知らずに居て平氣にそれを岸の方
へ浮き歸らせて居たからであらう。丈の高い、赤味を帯びた葦は、四邊に穂やか
な葉擦の音を立てた。静かな水はその前にかゞやいた。二人も亦ひつそりと話し
合つた。リーザは小さな筏のやうに造つた足場の上に立ち、ラヴレッキーは曲つ
た柳の幹に腰を掛けた。リーザは白い服を着、腰の周圍に矢張眞白な、幅の廣い
リボン巻いて居た。片手に麥藁帽子を提げ、片手に幾分力を入れて釣竿を持つ
て居た。ラヴレッキーはリーザの純潔な、いくらか嚴い所のある横顔を眺めた。
耳の後ろへ撫げ上げてある髪を眺めた。ふくよかな頬、小さい子供のやうにほ
つと赤らんだそのふくよかな頬を眺めた。『まア何て可愛らしいんだらう。さうや
つて、俺の池へ伸しかゝつて居る所は！』と、かう彼は思つた。リーザは此方は向か
ずに、水の上を眺めて居た。半ば眉をひそめ、目に日の光を避けるやうにして、

半ば、微笑を浮べて居る。近くに生えて居る菩提樹の影は二人の上に落ちた。

『あのねえ』とラヴレッキーは口を切つた。『僕は此間の二人の話をいろいろと考
へて見て、結局貴女は非常に良い女だと云ふ結論に達しましたよ』

『そんな事は妾一寸も……』とリーザは返答をしかけたが、急に當惑したやうに
云ひ淀んだ。

『貴女は良い女だ』とラヴレッキーは同じ事を云つて、『僕は此の通り野暮な男で
すがね。併しどんな人間でも貴女を愛しない譯には行かないと云ふ事は感じて居
ますよ。例へばレムです。あの先生の如きはたゞもう無暗に貴女を愛してる』

リーザの眉はひそめられたと云ふ程ではないが、微かに震へた。これはリーザ
が何か氣に入らぬ厭な事を聞く時に、いつもやる癖だ。

『僕は今日レムさんが氣の毒でなりませんでしたよ』とラヴレッキーは言葉を次
いで『あの不成功の歌ではねえ。それもまだ若くて失敗するんならば我慢も出来

ますが、彼様年が寄つてうまく行かないんぢや、なか／＼我慢が出来ないでせうよ。自分の力の衰へを知る位苦しい事はありませんからね。加之に老人の事だから、さう云ふ打撃に堪へるのは容易の事ぢやありませんよ……それ、お氣をつきなさい。魚が加つたやうですよ……だが噂に聞くと」と暫く言葉を切つて居た後でラヴレッキーが云ひ足した『あのウラデーミル・ニコライチ君は大相好い歌を作つたと云ふぢやありませんか』

『え』とリーザは答へて『大したものぢやありませんけれど、さう悪くはないんですよ』

『それで何ですかあの』とラヴレッキーは訊ねた。『彼の男は音楽にかけてもうまい方ですか』

『音楽には非常な才能を持つてゐらつしやるやうですけど、まだ十分それが修養されてはないんですよ』

『成程！で、人柄は良い方ですか』

リーザは笑つてちらりとフェードル・イワーニチの顔を見た。

『まあ何て妙な事を御訊きなさるんでせう』と彼女は糸を引き上げて再びそれをずつと先の方へ投げ入れながら叫んだ。

『別に可怪しい事はないぢやないですか。永い間居ないで、つい近頃此地へやつて来たばかりの人間として、親戚の一人として、僕は貴女に彼の男の事を訊くんですもの』

『親戚ですつて？』

『さうです。何でも僕は貴女の叔父と云ふやうな者に當つてると思ふんです』

『ウラデーミル・ニコライチさんは善い方ですわ』とリーザは云つた。『それに敏捷な方ですの。母様はそりや大好きなんですよ』

『で貴女は』

「良い方ですもの。好かない事はありませんわ」

「成程！」とラヴレツキーは云つて話を止めてしまった。半ば悲しげな、半ば嘲るやうな表情が彼の顔に漂うた。ちつと顔を見つめられてリーザはまごついたがそれでも笑顔はつゞけて居た。

「それではまア折角御目出度行くやうに」と終に彼は獨言のやうに云つて、首を向き直した。リーザは顔を真紅にした。

「そりや貴方間違つてゐらつしやるわ。フェードル・イワーニチさん」と彼女は云つて「悪いわ、そんな事をお思ひなすつちや……ですけれど貴方はウラヂミル・ニコラーイチさんはお嫌ひ？」

「えゝ、嫌ひです」

「何故？」

「僕の考では、彼の男に情と云ふものがない」リーザの顔に微笑はなくなつた。

「貴方はいつも人を批評なさるのにお厳しいのね」とやゝ暫く黙つて居た後でリーザが云つた。

「そんな事はないでせう。自分の事を一生懸命に考へにやならない時に、他人を厳く批判するやうなそんな権利が僕にあるでせうか。それとも貴女は相手が馬鹿馬鹿しく無頓着の人でない限りは、どんな人にも僕は笑物になるやうな人間だと云ふ事を忘れたんですか。時に」と彼は言葉を次いで「貴女は約束を守りましたか」

「どんな約束ですの？」

「僕の爲めにお祈りをしてくださいましたか」

「えゝ、祈りましたとも、毎日貴方の爲めにお祈りをしてゐますわ。ですけれどお祈りの事なんかは餘りばかり被仰らない方が好いわ」

ラヴレツキーはそのやうな事をする考が自分の頭には断じて起つた事がないと

云ふ事、どんな信念に對しても自分は最も深い尊敬を拂つて居ると云ふ事を、リーザに向つて説き出した。彼は更に宗教の論議にまで進み入つた。人類の歴史に於ける宗教の意義を論じ、キリスト教の意義を論じた。

『どんな人でもキリスト信者でなければなりませんわ』とリーザは造作もなく云つた。『神様はどんなものだとか、人間はどんなものだとか云ふ事を知る爲めではなくつても、人間は皆死なければならぬのですもの』

ラヴレッキーは思ひがけない驚きに、眼を上げてリーザの顔を見た。二人の視線は出遇つた。

『今被仰つたのは妙な御説ですわ』と彼は云つた。

『妾の説ではないんですよ』とリーザは答へた。

『貴女のではない……ですが何が貴女に死の事なんか云はすやうにしたんですか』

『存じませぬわ。妾たゞ時々その事を考へるんですもの』

『え』

『今の貴女を見たら、誰だつてそんな事があらうとは思ひますまいね。その通り晴やかな、幸福さうな御顔をして居らして、その通にこゝして居らして？』

『え、妾今は大變幸福なんですもの』とリーザは簡單に答へた。

ラヴレッキーはリーザの両手を取つて、情を籠めて接吻がしてやりたかつた。

『リーザさん、リーザさん』と折からマリヤ・デミトリエヅナが呼んだ。『まあ來て御覽！そりや見事な鯉が捕れたんですよ』

『今直行つてよ。母様』とリーザは答へて、その方へ行つた。が、ラヴレッキーは柳の幹に腰掛けたまゝ後に残つた。『俺は何だかまだ此の世にさも興味を持つてゐるやうな調子で彼の女に物を言つてたな』と彼は思つた。リーザは行く時に帽子

を木の枝に懸けて行つた。ラヴレッキーは何だか妙な、まアどちらかといへば優しい情緒に驅られて、その帽子を眺め、その長い、いくらか皺の見えるリボンを眺めた。リーザは直に歸つて来て、再び元の足場に立つた。

『どんな事から貴方はウラディーミル・ニコラーイチさんが情のない方だと思ひなさいますの』と暫くしてから彼女は訊ねた。

『それは最う僕の考が間違つてるかも知れないと云つたぢやありませんか。ですけどまア眞實の事は、時が證明するでせうよ』

リーザはだん／＼考へ込んだ。ラヴレッキーはヴシリエヴスコーに於ける自分の日常生活について話し出した。ミハレーヅイチの事も話した。アントンの事も話した。彼は今自分の胸の中を去來して居るあらゆる事をリーザと共に分ちたさに、何事も話して聞かさなければならぬやうな氣がした。リーザはいかにも心地よさうに、いかにも身を入れて居るやうに、ラヴレッキーの話に耳傾けた

リーザの口数の少ない返答と注意が、其人をいかにも素直にいかにも聰明らしく思せはた。ラヴレッキーは明らかにそれを口にも出さずして云つた。

『眞實ですか』とリーザは云つた。『妾何だか家の女中のナスチャのやうだと思ひますの。彼女と同じややうに妾も矢張自分の事は何とも云ひやうがありませんわ。彼女は何時でしたか自分の思つて居る男にこんな事を云つてゐましたのよ。』お前さんは妾に飽きるにちがひないよ。いつでも妾の事と云ふとお前さんは好さうにばかり云つてるけれど、妾は自分には何とも云つて見やうがないのだよ。』まアかうなんですの。』

『有難い！』とラヴレッキーは心の中で思つた。

兎角するうちにだん／＼夕暮が迫つて来たので、マリヤ・デミトリエヴナは家へ歸りたいと言ひ出した。小さい娘共のむづかるのを漸の事で池から離れさせて支度をさせた。ラヴレツキーは途中まで見送るのだと云つて、馬の用意をさせたマリヤ・デミトリエヴナを馬車に乗せてから、彼はレムを探したが、老人は何處にも姿を見せなかつた。釣が濟むと直に姿を隠したのだ。アントンは年には似合はぬ力を出して、バタ々々馬車の扉を閉めて、「親方やつてくれ」と鋭く叫んだ。馬車は動き出した。マリヤ・デミトリエヴナとリーザとは後の方の腰掛に座り、子供達と女中は前の方に座を占めた。

晩は暖かく静かであつた。馬車の窓は兩側とも開かれた。ラヴレツキーはリーザの乗つて居る方の側に近く、馬車と並べて馬を驅つた。片手を馬車の扉に載せかけ、平に歩いて居る馬の首に手綱を投げかけた。そして折々二言三言リーザと言葉を交へて居た。夕映がだん／＼消えて、夜が迫つて来た。併し空氣はだん

／＼暖かくなつて行くやうな氣さへした。マリヤ・デミトリエヴナは直にもう眠氣がさして来た。小さい娘共も女中も眠りこけた。馬車は速やかに、しかも滑かに走つた。リーザは身を前屈にしたから、心の中には何となく嬉しいやうな氣がして居た。今昇つたばかりの月は、彼女の顔を照らし、かぐはしい夜のそよ風は彼女の眼や頬を撫でた。彼女の手はラヴレツキーの手に近く馬車の同じ扉の上に置かれた。こんな風でラヴレツキーの心も嬉しさで一杯になつて居た。眼は決して相手の若い、柔和な顔を離れず、耳は小聲の語にさへ一種の妙調の伴うた相手の若やかな聲に聴き惚れた。かくて彼は途の半分以上も來てしまつた事にさへ氣が付かなかつた。彼はマリヤ・デミトリエヴナの目を覺させたくなかつたので、軽くリーザの手を握つて。

「僕達は最う眞實の友達となつたんですねえ。さうぢやありませんか」と云つたリーザは肯いた。彼は馬を留めた。が、馬車は留らずに走つた。軽く揺れ動き

ながら走つた。

ラヴレッツキーは並足で歸路についた。夏の夜の魅力は彼を封じ込んだ。前後左右の物皆が突如として得知らぬ有様ではあるが、それと同時に、どこか斯う親しみのある、懐しみのある有様に見えた。遠い所も近い所も一様にひっそりと静まり返つた。物の形は明瞭見えないが、ずつと遠くまで見渡された。そして此の深い静けさ、穏やかさの中に、何かしら若々しい、花のやうな生活が現れて居るやうに見えた。ラヴレッツキーの馬は右左に均等に揺れながら勇ましげに歩巾を伸ばして歩いた。その大きな黒い影が、歩くまゝに横へついて歩いた。馬の蹄の音にも云ひ知らぬ快さがあつた。金切聲に啼く鶉の聲にも云ひ知らぬ魅力があつた。星は輝く雲霧の裡に隠れ、まだ満月に間のある月は落ちていた光を放つた。その光は大氣に溶けて空一面に流れ、たま／＼横切り過ぎる薄雲を、燦をかけた金色に染めた。新鮮な空氣は眼の中にうつすりと潤を持たせ、身體中を快くつゝみ

自在に肺の中へ流れ込んだ。ラヴレッツキーはそれを喜び、更に自分の喜びを喜んだ。「おい、俺達はまた命があるんだぜ」かう彼は思った。「俺達はまた全く破滅はされなかつたんだ」

かうは思ったが、併し誰のお蔭でとも、何のお蔭でとも思はなかつた。と、又彼はリーザの事を思ひ耽つた。彼女はパンシンに惚れるやうな事は出来まい。とすると、若し僕が今とは違つた境遇で居て彼女に遇つたのならば——どんな事になるだらうて。そんな事を思った。それから又自分はレムの心を好く解して居るのだ、彼女が自分自身の事は何とも云ひやうがないとは云ふが、そんな事はどうでも好い、俺はたしかにレムの心を解して居るのだと云ふやうな事を思った。更に彼はリーザの彼様云つたのはあれは眞實ではない、その證據にはリーザはいくらも自分自身の事を云つてるぢやないか、そんな事まで思った。「そのやうな事はあんまりボカカ々被仰るのは好くありませんわ」と云つたリーザの言葉が、

ラヴレッキーの頭に再び戻つて来た。彼は物思ひに頭を屈げて、大分長い道程を歩いた。と、急に身を起して、大きな聲でかう云ふ文句をゆるい調子で繰り返して歌つた。

『我は崇め來し凡てを焼き盡したり。』

而も今は我焼き盡したる凡てを崇む』

かと思ふと彼は馬に一鞭強く當て、家まで驅けつづけに驅けた。

馬から下りて、彼は抑へがたい満足の微笑を湛へて、名残惜しさうに四邊を眺めた。夜——静かな、情深い夜は、丘にも谷にも一面に廣がつて居る。遠くから夜の薫はしい底から、——神の外に知る者のない所から——天とも地とも知れぬ所から——一種のふくよかな、やさしい暖かさが漂うて來た。ラヴレッキーは最後の挨拶をリーザへと送つて置いて、大急ぎに入口の階段を驅け上つた。

その翌日は何だか詮らなく過ぎた。雨は朝早くから降つて居た。レムは氣むづ

かしい、厭な顔をして、ますます固く唇を窄めて居た。まるで二度は開くまいと誓でも立てたやうだ。部屋へ入ると直に、ラヴレッキーはフランスの新聞の一束を臥床へ持つて上つた。二週間以上も開けずに卓の上に載てあつたのだ。彼は何の氣もなく新聞の封を切つて、欄から欄へとさつさと眼を通した。が別にこれと云ふ眼新しい事もなかつた。で、彼はまさに新聞を投り出してしまはうとした——が、突然何かに跳ね返されでもしたやうに彼は飛び上つた。新聞のとある一枚に、かのエム・ジュールと云ふ男が、かう云ふ『悲しむべき通信』を掲げて居たのだ。

『かの魅力に充ちたる、美しきモスクワ婦人』かう書いてある。『流行界の一女王』パリ—社交界の裝飾たるラヴレッキー夫人は、殆んど突然の逝去を遂げたり。此の報知、不幸にもあまりに確實なる此の報知は、今や彼、エム・ジュールの許に達したり。彼は』と言葉を次いで、『彼は故人の友人なりと云はる』

ラヴレッキーは衣服を着て、庭へ飛び出し、夜が明けるまで同じ徑を行きつ戻り
つして居た。

二十八

翌朝茶の席で、レムは町へ歸るから馬を貸してくれるやうにとラヴレッキー
に頼んだ。「最う仕事に取りかゝらにやならん時分です、仕事と云つても私の日
課の事ですが」と老人は云つた。ラヴレッキーは直には返事をしなかつた。他の
事に心を奪はれて居たらしい。

『いかにも』と漸く彼は云つて『僕も御一緒に参りませう』

下男の手も借りずに、レムはブン／＼怒つてうん／＼唸り聲を立てながら、自
分の小さい箱を荷造りし、二三枚の樂譜を引き裂いて焼いた。馬の支度が出来た
ラヴレッキーは部屋から出がけに、昨夜讀んだ新聞を衣囊に入れた。途中レムと

ラヴレッキーとはほんの少しばかり口を交へただけであつた。どちらも自分の物
思ひに耽つて、どちらも相手からそれを妨げられたくなかつた。そしていかにも
冷淡に二人は別れた。尤もかう云ふ風はロシヤ人の友人間にはよくある事だ。ラ
ヴレッキーは老人を下宿まで送り届けた。レムは馬車を下りる時に、手に小鞆を
持つて居たので、友の方へ手を差出す事もせず、兩手でその小鞆を前に抱へた。
そして顔も見ないで「左様なら」とロシヤ語で云つた。「左様なら」とラヴレッ
キーも應じた。そして自分の宿へ馬車を進めるやうに馭者に告げた。〇——市に
は彼の定めて借りてある部屋があつたのだ。

宿に着き、二三本手紙を書いてから、大急ぎで午餐を食べて、ラヴレッキーは
カリーチン家へ出掛けた。客間にはバンシンしか居なかつた。ラヴレッキーの姿
を見ると、バンシンは先づマリヤ・デミトリエヴナが直に來ると云ふ事を告げ、
早速最う愛嬌たつぶりの調子で話をしかけた。その日までバンシンはラヴレッキ

一に對して、傲慢とまでは行かないが、少なくとも輕蔑するやうな應對振をして居たのだが、リーザが前の日の旅行の話の中にラヴレツキーを立派な人物、敏捷な人物として話したのだ。それだけの事ではあるが、バンシンは最う其の「立派な人物」を擒にしてしまはうと云ふ氣になつたのだ。彼はカリーチン家の人達は皆ヴシリエヴスコを非常に面白がつて居たと云ふ事を語り、その樂しさうに話した時の様子までも叙べ立て、その舉に對して祝意を述べた。と、やがて例によつて、手際よく話を自分の方へ持つて行き、自分の事業を語り、自分の人生觀や社會觀や政府觀を語つた。ロシヤの將來に關しての意見も二三述べ、國を嚴重に治めるのが支配者の義務であると云ふ事を論じた。此に至つて彼は自分ながら可笑しくなつたと見えて氣輕に笑つた。そして自分のいろ／＼やつた事の中には、『ド　ポビユラリゼ　リデ　デユ　カダストル』（土地登記の觀念を普に任務を帯びてペテルスブルグに職を奉じた事があると云ふ事を云ひ足した。彼は随分永い事無

頓着な、自信のある態度を以てあらゆる難問題を涉獵し、重大な行政上の問題や政策上の問題を論じ去つた。其有様はまるで手品師が球を弄ぶやうであつた。「若し私が當局者であつたら斯う云ふ風にやるんですがなア」とか「貴方のやうな聰明な方ならば、立ち所に私の説に賛成なさるんです」とか、さう云つた風な言葉遣ひが絶えず彼の唇に上つた。ラヴレツキーは冷やかにバンシンの饒舌を聽いて居た。男振の美しい、敏捷な、無暗と派手な、晴やかな笑顔をした、愛嬌のある聲の、何物かを探り究めるやうな眼をした、此の青年をラヴレツキーはどうしても好きにはなれなかつた。他人の感情を讀むに獨特のすばやい洞察力を持つて居るバンシンは直に相手の心に自分が特別の満足を興へなかつた事を見て取つて、尤もらしい口實を拵へて其の場を去つたが、心の中では、ラヴレツキーと云ふ男は「立派な人物」かも知れないが、少しも愛嬌のない、氣むづかしい、つまり道理の解らぬ方の人間だと思ひ定めて居た。そこへ、マリヤ・デミトリエヴナが、ゲ

デオノーヴスキーを連れて、出て来た。續いてマールファ・チモーフエヅナとリーザとが現れ、その後から家内中の者が揃つて出て来た。すると又その後から音楽道樂の名のあるピエレーニチン夫人が訪ねて来た。痩せた小柄な女で、元氣はないが可愛らしい、まるで子供のやうな小さい顔をして居る。シユウ／＼音のする着物を着、條文のある扇を持ち、重たさうな金の腕環を偲めて居る。夫も一所に來た。肥つた赤ら顔の、手足の大きい、睫毛の白い男で、厚い唇にやく／＼した微笑を絶えず含ませて居る。妻は人中では夫と口は利かないが、家に居て心のないならかな時には、いつも夫の事を乳臭い豚と呼んで居る。パンシンも戻つて來た。部屋は人と聲とで一杯になつた。かう云ふ混雜した集りはラヴレッスキーの趣味には合はなかつた。就中ピエレーニチン夫人は厭でならなかつた。おまけに夫人は眼鏡越にラヴレッスキーの方をばかり見つめて居るのだ。彼はリーザさへ居なければ、直にも出て行きたかつた。彼はたゞリーザとだけ一言でも二言でも口が

利きたかつたのだが、永い間都合の好い機會がなくて、たゞ目だけは女から離さずに居てせめても心の奥に人知れぬ歡びを得て、それで満足するより外はなかつた。して又その時位彼の眼にリーザが可愛く、氣高く見えた事はなかつた。ピエレーニチン夫人の傍に居るので餘程引立つたからもある。ピエレーニチン夫人は椅子に腰掛けては居るが絶えずせかくして、狭い小さい肩をゆすぶつたり、娘らしい忍笑をしたり、わざと眼を上げて、廣く見開いたりして居た。リーザは靜かに座つて、正面に皆に面し、ニコリともしないで居た。カリチン夫人はマールファ・チモーフエヅナやピエレーニチン夫人やゲデオノーヴスキーと骨牌をするのに座つた。ゲデオノーヴスキーの遣り方はいかにも鈍い上に、終始間違を爲つづけて、顔を皺めたり、手巾で顔を拭いたりして居た。パンシンは沈んだ風をして、簡單な、意味ありさうな、そして悲しげな文句を時々洩らした。まるでまだ人から認められない天才者とも云つた風だ。それで居ながらピエレーニチン

夫人から盛に媚をよせられ懇望されたにも拘らず、流石に自分の歌を歌つて聞かす程の氣にはなれなかつた。ラヴレッスキーの前をひどく憚つて居るのだ。ラヴレッスキーもあまり口をきかなかつた。部屋へ入つて来た時に、その妙な顔の表情が何よりも先づリーザを驚かせた。きつと何か自分に云ひたい事があるのだとリーザは直に感づいた。併し何だか自分にも分らないが、ラヴレッスキーにそれを訊ねて見るのが怖かつた。でもとうとう茶を入れに次の室へ立つた時に我知らずその方へ向いたので、それと見て直にラヴレッスキーが蹤いて出た。

『どうかなさいましたの？』とサモワルの上に茶出しを載ながらリーザは云つた。『どうしてです。何處かそんな所がありますか』と彼は問ひ返した。

『今日に限つて何ですか平常とお違ひなさいますもの』
ラヴレッスキーは卓の上のしかゝるやうにして

『實はね』と彼は口を切つた。『僕今日は貴女に聞いて戴きたい出来事が一つあ

るんですが、今はとてもためです。兎に角此の記事の中に鉛筆で印をつけて置いた所がありますから、それを讀んでください』かう云ひ添へて彼は持つて来た新聞をリーザに渡した。『どうか秘密にして置いてくださいね。僕又明日の朝やつて参りますから』

リーザは非常に當惑した。と、バンシンが戸口に姿を現した。リーザはうろたへて新聞を衣籠へ入れた。

『リサウエータさん貴女は「オーベルマン」をお読みでしたか』とバンシンは心ありげな様子で訊ねた。

リーザは部屋を出しなげに暖昧な返事をして、やがて二階へ上つた。ラヴレッスキーは容問へ戻つて、骨牌臺の傍へ寄つた。マールファ・チモーフエヅナは帽子のリポンを後へ跳ねやり、顔を真紅にして苦しみながら、仲間のゲデオノーヴスキが少しも骨牌をやれないと云つて、ブツブツ不平を鳴らして居る。

「骨牌つてもものは、貴方」と彼女は云つた。「無駄話をするやうに、さう造作のないもんぢやありませんよ」

ゲデオノーヴスキーは相變らず眼をバチ／＼やつたり、顔を拭いたり爲續けて居た。リーザは客間へ入つて、隅の方に坐つた。ラヴレツキーはその方を見た。リーザも此方を見た。二人とも居たゝまらぬやうな氣がした。ラヴレツキーはリーザの顔に、當惑さうな、そして心密かに此方を責めて居るやうな表情のあるのを読んだ。彼は思ふやうに彼女と話す事が出来なかつた。かうやつて彼女と同じ部屋に、多くの客の一人として居る事は、あまりに苦しかつた。彼は意を決してその場を去る事とした。リーザに暇を告げる際に、彼は明朝來ると云ふ事を幾度も幾度も繰り返して、その上自分は貴女の友情を固く信じて居ると云ふ事まで云ひ足した。

「あつしやいな」とリーザは相變らず困つたやうな顔をして答へた。

パンシンはラヴレツキーが居なくなつたので、大に元氣づいた。ゲデオノーヴスキーに助言をしたり、ビエレーニチン夫人に冷かすやうな嬉しげなせを云つたりして、とう／＼終には自分の歌を歌つた。が、リーザに對しては以前と變らぬいかに深い意味ありげな、どちらかと云へば愁を含んだやうな態度で話したり顔を見つめたりした。

ラヴレツキーは又しても眠らぬ夜を明した。悲しみはしない。激しても居ない心は至つて穩やかなのだ。が、併し眠る事が出来なかつた。過去を追懐すると云ふ事さへなく、彼はたゞ偏に自分の生活を眺めた。心臓はゆるく平らに脈打ち、時は音もなく過ぎて行つた。彼は眠らうと思ひもしなかつた。たゞ時々「どうせ信するに足らぬ事だ。馬鹿々々しい」と云ふ考が頭の中に閃めいた。が、彼はちつと立ちすくんだまゝ、頭をうなだれて更／＼自分の前途の生活に思ひ耽るのであつた。

マリヤ・デミトリエヴナは、翌日ラヴレッスキーが見えた時に、あまり懇な待遇をしてくれなかつた。「眞實に最う常客だ」と彼女は思つた。左程眼中には置いて居ないのだ。それに昨夜御氣に入りのパンシンがラヴレッスキーの事を、至極上手に賞めながらけなして行つた。兎に角マリヤ・デミトリエヴナの方ではラヴレッスキーを御客様とは認めて居ないのだ。親戚の者、まるで自分の家の者のやうな人だもの、何をそんなにもてなす必要があるもんかと思つて居るのだ。そんな風で、半時間もたぬうちにラヴレッスキーは最う外へ出て、庭の木下路の間をリーザと一緒に歩いて居た。レーノチカとシエローチカは二人から少し離れて花園の中を駆け廻つて居た。

リーザは平生の通りに落ち着いて居たが、顔色だけはいつもより蒼かつた。彼

女は衣袋から小さく折つた新聞を取り出して、それをラヴレッスキーに渡し、

『怖ろしい事ですのねえ』と云つた。ラヴレッスキーは何とも答へなかつた。

『ですけどこれは多分眞實ぢやないでせうよ。まさかねえ』とリーザは云ひ足した。

『そんな事だらうと思ふから、僕も貴女に誰にも云つてくださるなと頼んだやうな譯なんです』

リーザは少しばかり歩いて、

『如何です』と、口を切つて。『貴方は悲くは思つて居らつしやらないの？』

『僕の感情は僕には解りません』とラヴレッスキーは答へた。

『でも貴方は一度は彼女を愛して居らしたんでせう？』

『さうです』

『非常にでせう?』

『さうです』

『それで居て彼女が亡くなつても悲しくはお思ひなさいませんか?』

『僕にとつては、彼女は最う夙の昔に死んでしまつてゐるんです』

『そんな罪深い事を被仰るもんぢやありませんわ。あら御免あそばせ。悪く取つてくださつちや厭よ。貴方は妾を、友達だと被仰つてくださるのですから、友達ならば何を云つても好いでせう。妾眞實怖しい事に思ひますの……昨夜貴方の御顔色が大變お悪かつたですのねえ……それはさうと貴方だつて覚えて居らつしやるでせう。あのつひ此間彼女を悪く被仰つた事を。丁度あの頃だつたかも知れませんわ、彼方の亡くなつたのは。怖しい事ですわねえ。妾何だかその事が貴方への罰ではないかと思ひますの』

ラヴレツキーは苦しさうに笑つた。

『貴女はさう思ひなさるかも知れんが、少なくとも僕は今自由の人間なんですから』

リーザは微に震へた。

『そんな事を被仰るのはお止しなさいましな。貴方の自由は貴方に何の役に立ちませう。今はそんな事を御考へなさる場合ぢやありません。何よりも先づ赦しと云ふ事を御考へにならなければならぬ時ですわ』

『僕は最う夙の昔に彼女を赦してゐるんです』とラヴレツキーはたまらなさうな手つきをして口を挿んだ。

『いえ、さう云ふのぢやありません』とリーザは顔を赤くしながら答へた。『妾の申す事がお解りないのね。妾の申したのは貴方御自身がどうかして赦されるやうになさなければならぬと云ふ事なのです』

『赦されるつて、誰にですか』

「誰にですつて？ そりや神様よ。神様の外に誰が妾達を赦す事が出来るでせう」
ラヴレッキーはリーザの手を取つた。

「あゝ、リーザさん。眞實です」と彼は叫んで「僕は最う此の通り十分今迄に罰し
られました。最う何もかも償ひがついたんですよ。眞實に」

「そりやいけません」とリーザは低い聲で呟いて「貴方はお忘れなすつたのです
わ。あのホラつひ此の間の事です。貴方が妾にあの事を被仰つたのは。あの時
はまだ貴方は彼女を赦してお上げなされるやうな御氣はなかつたのぢやありません
か」

リーザは暫く口を噤んで木下路を歩いたが、ふと立ち留つて、

「それにあの、御嬢さまは？」と訊ねた。

ラヴレッキーはびくりとした。

「なに、御心配には及びません。その事なら僕は最う何もかも手紙で云つてやつ

てあるんです。娘——貴女の被仰るその娘の行末の事は、ちやんと差支へのない
やうにしてあります。その事は最う御心配には及びないんですよ」

リーザは悲しさに微笑した。

「ですが貴女の被仰る事は無論正しい事なんです」とラヴレッキーは言葉をつい
で「僕のこの自由が何になるもんですか。何の役に立つもんですか」

「何時貴方はその新聞を御覧なさいましたの？」とリーザは相手の言葉に答へず
に訊ねた。

「貴女が御出くだすつた、あの翌日です」

「それで、貴方が涙さへ出なかつたと被仰いましたけれど、そんな事があり得る
ものなのでせうか」

「さう。僕は非常に驚きましたが、併し何處から涙が出ませう。過ぎ去つた事を
思つて泣くのですか。いや、過去の事は最う僕には全く消えて失くなつて居んで

す。無論彼女の不埒が積極的に僕の幸福を破壊したのではありませんが、それにしても僕に最う幸福と云ふものが失くなつたと云ふ事實をたらしただけは確かです。それでは現在に泣くべき事がありますか。それも或は今二週間も早く此の事實が知れたのならば、僕も今よりは悲しんだかも知れませんが……』

『二週間ですつて?』とリーザは鸚鵡返しをして『ですが此の二週間にどんな事が貴方にお有りになりましたでせう?』

ラヴレッキはそれには答へなかつた。リーザは前よりも餘程顔を赤くした。

『さう、最う御解りでせう』とラヴレッキは突然に叫んで『此の二週間に僕は潔い女の心の値を知つたのです。それで僕の過去の生活は以前よりも遙かに僕から遠ざかつてしまつたやうです』

リーザはどうして好いか解らなくなつて、レーノチカとシエローチカの居る花園の方へいとやかに歩を移した。

『ですが僕はその新聞を貴女に御目にかけて事を喜んで居ます』とリーザの後について歩きながらラヴレッキは云つた。『最うこれで僕も貴女に何事も隠し立てをしないやうになりました。その代りどうが貴女からも同じやうに信じていたゞきたいんです』

『眞實ですか』と立ち留つてリーザは云つた。『それは無論妾だつていえ、妾には最う出来ない事なんですの』

『何ですつて? ねえ、何ですつて?』

『眞實に妾とてもだめだと思ひますの——ですけれど』と云ひ足してリーザは笑顔をしたがらラヴレッキの方へ向いて『だつて半信半疑では何にもなりませんもの。御存じでもございますか知れませんが、妾今日或る手紙を貰ひましたの』

『バンシンからでせう』

『え、どうして御存じ?』

「彼の男が結婚を申し込んだんでせう？」

「ええ」と答へて、リーザは眞面目な顔をして正面にラヴレツキの方を見た。ラヴレツキも同じく眞面目な顔でリーザを見た。

「成程、では結局僕にはどんな返事をしてくださるんです」と彼は漸くの事であつてのけた。

「何とお答へ致して好いか解りません」と握つた手を下に落しながらリーザは云つた。

「どうしてです。では彼の男が御氣に入つたんですね」

「ええ、妾彼の方は好きですの。立派な方らしいんですもの」

「貴女はそれと同じ事を、同じ言葉で三日前にも云ひましたねえ。では何ですかあの世間で普通愛と云ふやうな強い、熱した情で、貴女はあの男を思つてゐらつしやるんですね」

「貴方が取つてゐらつしやるやうなさう云ふ意味では——いえ、さうではありませんの」

「ぢや貴女はあの男を愛してはゐらつしやるんですね」

「ええ。ですけどやむを得ないのですもの」

「と被仰るのは」

「母様が彼の方を好きなんですもの」とリーザは言葉を次いで、「彼の方はそりや深切でゐらつしやいます。妾だつて彼の方に對して別にどうと云つて難をつけるやうな事はありません」

「それで居てまだ躊躇してゐるんですね」

「ええ——それと云ふのも、多分——貴方が、貴方の御言葉が原因なんでせうよ。あのおぼえてゐらつしやいませう。三日前に被仰つた事を。ですけどそれも皆妾が弱いからなんですわ」

『えー』とラヴレツキーは思はず叫んだ。聲は震へて居る。『くだらない理窟を云つて自分を欺くやうな事をなすつちやいけませんよ。愛がなくては自分の身を任す事は出来ない』と云ふのは眞實の貴女の心の叫びではありませんか。その心の叫びを弱味だなどしてしまふのはお止しなさい。よし貴女が彼の男の者になるおつもりでも、自分の愛して居ない男にそんな恐ろしい義理立をなさるのは好くないですよ』

『妾全く順つて居ますの。少しも我を立てないつもりですから』とリーザは小さい聲で云つた。

『順ふなら御自分の心に順ひなさい。貴女に眞實を語るものは貴女の心だけです』とラヴレツキーは相手の言葉を抑へて『経験とか深慮とか、そんな事は皆つまらない事です。自分で自分の最も大切な、此の世の唯一つの幸福を奪つてしまふやうな事はなさいますな』

『まあ。では貴方は愛の爲めに結婚をなさいました。それで幸福でしたの？』ラヴレツキーは腕を高く上げて、

『あゝ、僕の事は云つてくださるな。若い、無経験な、育て方の善くなかつた小僧つ子が戀の爲めに過られる——それ位の事さへ貴女には解らないんですね。それだけでなくどくうして自分を欺くやうな事が出来ませう。たつた今僕は自分は幸福と云ふものは知らなかつたと云ひましたねえ。そりや違つてゐます、僕は幸福だつたんです。』

『妾ねえ、貴方、實はかう思ひますの』とリーザは低い聲で云つた。相手の人の云ふ事に同意しない場合には、いつもかう云ふ風に聲を低くするのが、リーザの癖だ。殊にその時は心が激して居たのだ。『どうせ此世の幸福は妾達の勝手にはならないのですわ』

『私達にですつて？ね私達に？』かう云つて彼はリーザの両手を握んだ。リーザ

は蒼くなつた。何だかひどく恐れて居るやうだ。が、それでもなほ凝と此方の顔を見守つて居る。ラヴレツキーは言葉を次いで『せめて自分達の生活さへ破壊しなかつたら好いちやありませんか。そりや或る人にとつては愛の爲めの結婚は不幸であるかも知れんが、貴女にはさうぢやないかも知れんでせう。殊に貴女のやうな穏やかな落ちついた氣質で、精神の明らかな方には當更でせう。愛がなく、徒に義務や自己犠牲や、つまりさう云つた風な考から結婚なさるやうな事はどうぞやめてください。……さう云ふ事は多く不忠實な事です。勘定づくめの事です。或はそれより悪いかも知れん。僕を信じてください。僕にはそのやうに云ふ権利があるんです。その権利を得るのに非常に高價な値を拂つて居るんです。若し貴女の神様が……』かう云ひかけて、ふとラヴレツキーは、レーノチカとシユローチカがリーザの傍に立つて居るのに氣がついた。二人はあつげに取られて黙つて此方を見て居た。彼は握つて居たリーザの手をうらたへて放して、『御

免なさい』と云つた。そして家の方へ歩き出した。

『たゞ一つだけ御願して置きたいのは』とリーザの傍へ戻つて来て彼は云ひ添へた。『直に決めてしまひなさらずに、暫く待つて、僕の云つた事を考へて見てください。よし僕を信じてくださらないにしても、又深慮の上に結婚をお決めなさつたのにしても——兎に角パンシンと結婚なすつてはいけません。彼の男は貴女の夫にはなれませんよ。まア何しろ急がないと云ふ事だけを約束して置いてください。好いでせう』

リーザはラヴレツキーに答へやうとしたが、一語も發せずにとまつた——それは別に「急いである」と決心したわけではなく、心臓があまり烈しく鼓動したのと、恐怖に近い一種の感情が息を詰まらせた爲めであつた。

カリーチン家から出かけに、ラヴレツキーはバンシンに出遇つた。二人はお互に冷かな挨拶をして別れた。下宿へ歸つてラヴレツキーは自分の部屋へ引籠るとこれまでで経験した事のないやうな情緒が湧き起つた。平和な、まるで化石したやうな状態になつて居たのもつひ此の間の事ではないか。「俺はまるで河の真底にあるやうなものだ」と思つたのもつひ此の間の事ではないか。こんなに急に變つた状態に陥るのはどうしたのだらう。何が彼を静寂の境から引張り出したのか。最も平凡なる、如何ともなし難き、而も常に思ひがけない、かの死か。さうだ。だが彼は「リーザは果してどんな返事をバンシンにするだらうか」と云ふ問題程には、自分の妻の死や自分の自由と云ふ事を考へて居ないのではないか。

此の三日間と云ふものリーザを見る自分の眼が違つて來たと云ふ事に彼は氣がついた。あの時家へ歸る途すがら、夜の静けさの中で彼の女の事を思つた時にも自分はたしかに「若しこれが」と獨語つたのだ……その「若しこれが」は、あの

時は過去の事と結びつけて、考へ得ないことに思つては居たが、今はそれが實際の事となつて來たのだ。尤もあの時に想像した程ではない。が、併し事實は事實だ。此に至つて彼の自由も何の力もない。「彼女は母の云ふまゝになるだらう」かう彼は思つた。「バンシンと結婚するにちがひない。だがよし彼の男をはねつけた所で、俺には結局同じ事なのではないか」こんな事を思ひながら彼はひよつと鏡の前立つて、自分の顔をつくく眺めて、肩をゆすつた。

そのやうな事を思ひ耽つて居るうちに、その日はいつか暮れて、晩になつた。ラヴレツキーは再びカリーチン家へ出かけた。急ぎ足に歩いたのだが、その家へ近づくにつれて足が重くなつた。見ると石段の前にバンシンの軽い馬車があつた。「なアに、俺は主義主義の人間にやならないぞ」かう思つて、家の中へ這入つた中からは誰も出て來ず、客間にも人の居る氣勢もなかつた。彼は戸を開けた。マリア・デミトリエヴナがバンシンを相手にピケット（骨牌の一種）をやつて居た。

パンシンは黙つて頭を下げたが、女主人は「あら、思ひがけなかつたのねえ」と大きな聲で云つて、一寸顔をしかめた。ラヴレッキは女主人の近くへ座を占めて、骨牌をのぞきかけた。

「貴方はビケットを御存じ？」と心の中ではうるさく思つて居るやうな調子で夫人は訊ねて、「あ、此骨牌を出すんぢやなかつた」と叫んだ。

パンシンは九十を數へて、更に眞面目臭つた鹿爪らしい顔をして、悠然たる上品な態度で、そろ／＼隠謀と廻らし初めた。これは外交家のやるにふさはしい事で、殊に彼の屈強と成熟とをどうかして感心させてやりたいものだと思ふやうな有力な地位のある人達に對して、彼がベテルスブルグでこれをやつた事は盛なものであつたに違ない。「百一つ、百二つ、ハート、百三つ」と度を量つたやうな低からず高からぬ調子に彼の聲は響いた。ラヴレッキはその響が果して心よからぬためなのか、それとも得意な爲めなのか、判断がつかかなかつた。

「マルファ・チモフエヴナさんに御目にかゝれるでせうか」とパンシンの前よりも一層容態振つて骨牌を切り始めたのを見て、ラヴレッキは訊ねた。パンシンの様子には最う藝術家らしい所なんか更になくなつた。

「好いでせうとも。二階に御出でのすから」とマリヤ・デミトリエヴナは答へて「兎に角訊いて御覧なすつたら如何です」

ラヴレッキは二階へ行つた。マルファ・チモフエヴナも彌張骨牌をして居た。「婆娘」と云ふやり方で、相手はナスタシヤ・カールボヴナであつた。ラヴレッキが行くと、犬のロスカは吠えたが、二人の婆さん達は丁寧に迎へてくれた。マルファ・チモフエヴナの方は殊に機嫌がよかつた。

「あら、フエードヤだねえ」と口を切つて「さあ何卒お坐り！丁度今勝負がつくと云ふ所なんだよ。果の砂糖漬でも喰べないかね。シエーロチカ、母の壺を持って來ておくれな。喰べたくないの？まあ好いからお坐りよ。煙草だけは吸つてお

呉れでないやうにねえ。妾煙草には我慢が出来ないのだから。それにマトロスが
むせるといけないからねえ』

ラヴレッキは少しも煙草は吸ひたくないと云ふ事を慌て云つた。

『今迄下に居たの?』と老夫人は言葉を次いで『誰か居たかえ。相變らずパンシ
ンが居たんだらうねえ。リーザに遇つたかえ。遇はなかつたつて? 彼女は此方
へ來たがつて居たのだよ。あら、噂をすれば影つて、眞實にやつて來たよ』

リーザは部屋へ入つて、ラヴレッキの居るのを見て顔を赤くした。

『妾ほんの一寸居て行きますのよ』とリーザは口を切つた。

『何故一寸となんて云ふのだえ』と老夫人は遮つて、『何故、さう常でもせかく
するんだらう、若い人達は? 此の通り御客さんがあるのぢやないかね。少しは
話し相手をして、待遇してやつてお呉れな』

リーザは椅子の端へ腰かけて、眼をラヴレッキの方へ上げた。そして自分が

パンシンと會見した次第を知らせるのは出来ない事ではないやうな氣がした。併
しどうしてそれを話したらば好いか。何だか云ひ悪くもあり、恥かしくもある。
知り合つてから未だ日も浅いし、それに此の人は教會へは滅多に行く事のない、
そして自分の妻たる者が死んでも平氣で居るやうな人だ——でも此の通り自分は
最うすつかり自分の秘密を此の人に打ち明けて居るのだ……此人が自分に氣のあ
るのも事實だし、自分だつて此の人を信じ、此の人に心を引かれて居る。それは
さうに違ひないが、いづれにしても恥かしい事は同じだ、何だか見知らぬ人が自
分の清い、汚れない、私室へ入つて來たやうな氣がしてならないのだ。

マルファ・チモフエヅナは待遇の助けに來てくれた。

『さア、お前さんが此の人を待たしてくれないで』とマルファ・チモフエヅナは云
つて、『誰がお前さんしてくれる人があるもんかね。妾は相手をするには餘り年老
過ぎて居るし、此人は妾の相手にはあんまり敏過ぎるし、それかと云つてナスタ

シヤ・カール・ボツナさんの御相手には此の人は少し年が多過ぎる。その女には何でもほんの若い男でなければ御目にとまらないと云ふのだからねえ』

『妾どうしたら好いでせう』とリーザは云つて、『もしお宜しいなら、ピアノでも弾いて見ませうか』ともじくしながら云ひ足した。

『結構！ お前さんはほんとに好く氣の利く娘だよ』とマルファ・チモフエヅナは答へて、『ぢや、下へ行つてね。濟んだらば歸つてお出よ。妾「婆娘」をして居ただけけれど、あまり好かないのさ。でも敵を取つてやらなくちやね』

リーザは起つた。ラヴレツキーはその後につゞいた。梯子段を下りやうとしてリーザは立ち留つて、

『よく云つたものですわね』と口を切つて、『眞實に人の心つてもものは矛盾だらけのものですわ。貴方の例に脅かされて、愛の結婚なんか妾は信じないやうにならなければならぬ筈なんですけれど、妾は……』

『貴女は彼の人を拒絶なすつたんですか』とラヴレツキーは言葉を挟んだ。

『いえ。ですけれど承諾もしませんでした。妾何もかもあの方に打ち明けました。妾の感じた事を残らず云ひました。そして暫く待つてくださるやうに御願ひしましたの。妾のした事が御氣に入りましたか？』と云ひ足してちらつと笑顔を見せた——と、欄干に手をすべらせて梯子を駆け下りた。

『何を弾きませう』とピアノを開けながら、彼女は訊ねた。

『貴女のお好きなものを』と答へて、ラヴレツキーはリーザの顔が見えるやうに坐つた。

リーザは弾き出した。やゝ暫らく眼を指の運びから移さなかつた。と、ラヴレツキーの方をちらりと見て、手を留めた。ラヴレツキーの顔は、一種異様に美しくリーザの眼に映つた。

『どうかなさいましたの？』とリーザは訊ねた。

『何うもしません』と彼は答へて、『僕は非常に幸福です。僕は貴女の事を嬉しく思つてゐるんです。御目にかゝつて實に嬉しい——どうぞ後を聞かして頂戴』
『妾かう思ひますの』と暫くしてリーザが云つた。『あの、若し彼の方が眞實に妾を愛してゐらつしやるのならば、何もあんな手紙をおよこしなさらなくても事ですわ。きつと妾がすぐに御返事が出来ないとお思ひなされたに違ひありません』

『そんな事は何でもない事です』とラヴレツキーは云つて、『大事なのは貴女が彼の男を愛して御出でない』と云ふ事です』

『およしあそばせ、どうして妾達はこんな事を云ひ合つて居られませう。妾何だか貴方のお亡くなんなさいました奥様の事が思はれてなりませんの。妾貴方が怖いやうな氣がしますの』

『ねえ、貴方、家のリーちゃんの上に彈きますこと』折から客間でマリヤ・デ

ミトリエヅナはパンシンに向つてこんな事を云つて居た。

『さうですなア』とパンシンは答へて、『實に巧い』

マリヤ・デミトリエヅナは優しげに若い客を眺めたが、客の方では前よりも更に氣取つたむづかしい様子をして、『王が十四』と呼んだ。

三十一

ラヴレツキーは青年ではなかつた。彼はリーザによつて心の中に起された感情の性質につきて永く自分を欺いて居る事は出来なかつた。つひに其の日、自分たしかに彼女を戀して居るのだと云ふ最後の信念に達した。だが、この信念は彼に左程大きな快味を與へなかつた。彼は思つた。『三十五にもなつて一人の女に全心を打こんでしまふと云ふ位の事より外に俺には最つと好い事がされないのか。それにしてもリーザは彼女のやうぢやない。まさか俺を汚らはしい犠牲にするや

うな事はあるまい。俺の仕事から俺を誘ひ出してしまふやうな事はすまい。きつと困難な真直な仕事をするやうに俺を勵ましてくれるだらう。そして俺は彼女と手に手を取つて高尚な目的に向つて進むだらう。さうだ』と更に彼は自分の考をまとめて見た。「かう考へて見れば皆結構だが、併し何よりも一番悪いのは、彼女が少しも俺と手を取つて歩かうとしない事だ。俺が彼女を怖がらせたと言ふ以上、最うそれにちがひないのだ。が、パンシンをも愛して居ない——せめてそれが情ない慰藉だ」

ラヴレツキーはヴシリエヴスコへ歸りは歸つたが、四日とつゞけて居れなかつた——それ程彼にはつまらなく思はれた。彼には又何となく事の明瞭しない苦しみがあつた。新聞に出て居たエム・ジュールの記事には、まだ確めなければならぬ餘地がある。然るに如何なる種類の手紙も届かない、彼は又市へ出掛けて、カリーチン家で一晚を過した。マリヤ・デミトリエヴナが自分を厭がつて居る事は

容易く知れた。が、ビケットをやつて十五ルーブル勝たしてやつて、それで幾分心を和らげさす事が出来た。その前の晩に夫人はリーザに「キイア オンシ

グラン リデイキユール」(鹿げた馬)人と、餘り親しくしないやうにと、云ひ聞かせたと云ふが、それにも拘らずラヴレツキーはリーザと二人ぎりて小半時間も居た。彼はリーザの心にある變化の起つた事を見出した。リーザはたしかに前よりも一層深く考へ込んで居る。何故居なくなつてしまつたのかとラヴレツキーを責め、明日教會の集りへ行かないかと訊いた。その翌日は日曜だつたのだ。

『おらつしやいな』と相手の返事する隙もなく云つて、『彼の女の精靈の平和の爲めに二人で祈りませうよ』こんな事を云ふかと思ふと、やがて自分は今どう振舞つて好いか分らないのだと云ふ事を云つたりした。此の上自分の決斷の爲めにパンシンを待たせて置く権利が自分にあるのか、ないのか、リーザには解らなかつた、そんな事まで云つた。

『何故さうなんです？』とラヴレツキーは訊ねた。

『實は』と彼女は云つて、『妾今では自分の決断がどんな風になるかと云ふ事が何だか怪しくなり出しましたの』

リーザは頭痛がして來たから、二階の自分の部屋へ行くと云つておづ／＼しながら指先をラヴレツキーの前へ差し出した。

翌日ラヴレツキーは集へ行つた。入つて見ると最うリーザは教會へ來て居た。此方へは振り向きもしなかつたが、ラヴレツキーの來た事には氣づいて居た。彼女は熱して祈つた。眼は落ちついた光に充ちて居た。靜かに頭を下げて又上げた。ラヴレツキーは自分の事も祈つて居るのだと思つて、驚くべき優しさが胸に溢れた。彼は嬉しく思ふと共に、いくらか恥かしいやうな氣がした。人々の敬虔さうな起立、親しげな顔、聲の整つた歌、香の薫、斜に窓から射し込んで來る日影、壁やアーチ型になつた屋根裏の暗さ、凡て其等のものが胸の奥までも沁み

込んだ。久しく彼は教會へ來た事がなかつた。久しく彼は神に面を向けた事がなかつた。今でもなほ一言も祈りの言葉を發しない。黙禱すらしないのだ。けれども、少なくとも心の中では、よし肉體でさうはしないまでも、たしかに彼は頭を下げて、おとなしく地面へ身を伏して居た。子供の時分によく教會へ行つて、額に或る冷たい感觸を覺えるまでも祈つたものだ、彼はそれを思ひ起した。あの時分には、その冷たい感觸は自分を嘉納してくれた守天使が、自分の額に慈悲の印を捺してくれるのだと思つて居た。彼はリーザの方を見て、『貴女は俺を此處へ連れて來たんだ』かう彼は心で思つた。『どうか觸れてください。俺の靈に觸れてください』

リーザは彌張穩やかに落ちついて祈つて居た。顔に歡びが充ちて居るやうに、彼には見えた。今更のやうに彼の心は和げられた。彼は他の一人の精靈の爲めに平和を祈り、自分の爲めに赦を祈つた。

二人は入口の所で出遇つた。リーザは嬉しさうな、而も眞面目な様子でラヴレツキーに會釋をした。太陽は晴やかな光で教會の庭の若草を照らし、女共の條文のある着物や頭巾を照した。近くにある教會の鐘は頭の上で鳴り響いた鴉は生垣のあたりに啼いて居る。ラヴレツキーは頭に帽子も被らず、唇に微笑を浮べて立つた。あるかなきかの軟風が彼の髪を吹き上げ、リーザのリボンも吹き上げた。彼はリーザと、それからリーザと一緒に來たレーノチカとを馬車に乗せてやり、自分は又自分の持つて來た金を残らず貧乏な人達に分けてやつた。そして穩やかに家路に就いた。

三十二

ラヴレツキーにとつて苦しい数日が続いた。彼は絶間なく熱に浮されて居るやうな氣分で居た。毎朝郵便を受取りに行つては、ふる／＼震へながら手紙や新聞

を開いた。併し彼の怖ろしい噂を確めるやうな事實も、亦それを打ち消すやうな事實も、それ等の中から見出す事が出来なかつた。時として彼は自分の身が忌はしくなつた。

「まあ何と云ふ事だ。まるで血に飢ゑた禿鷹のやうに俺は自分の妻の死んだ事の確な知らせを待つて居る」彼はこんな風に自分を考へる時があつた。彼は毎日のやうにカリーチン家を訪れた。併し其處もだん／＼彼には安かな所でなくなつた。女主人は明らかに彼に對して不機嫌で、ひどく此方を卑下して居る。パンシンは態とらしい、誇張した丁寧な態度を向るし、レムは持前の人間嫌ひを振り廻して碌に挨拶もしない。甚しきはリーザまでが彼を避けるらしくした。よし二人限りで居るやうな事があつても、以前のやうな平氣な様子がなく、いかに迷惑さうで、何を云つて好いか解らぬと云つた風だし、此方でも同じく工合が悪いのだ。僅二三日の間にリーザは彼と相知つた當時とは全く打つて變つたものとなつた。

舉動にも、聲にも、一種の震へを秘した。その笑聲にまでも以前には少しもなかつた不安の影が見えた。マリヤ・デミトリエヴナは眞實の我儘者らしく、一向に娘の様子などは疑はなかつたが、マルファ・チモフェヴナは自分の氣に入つたその人の上に監視の眼を放つやうになつた。ラヴレツキーは先日新聞をリーザに見せた事をくりかへし後悔した。彼は自分の心の中に純潔な女の心に逆つた何物かのある事を意識しない譯には行かなかつた。彼は又リーザの變化は内心の争闘の結果で、つまりどんな返答をパンシンに與へやうかと云ふ惑ひから來たのだと思つた。或日リーザはウォルター・スコットの小説を一冊彼に返した。それは兼ねてリーザが彼から借りたものであつた。

「讀みましたか」とラヴレツキーは訊ねた。

「いえ、今讀むやうな氣になれませんから」とリーザは答へて、直に其場を去らうとした。

「一寸待つてください。貴女と二人限りで居るのは久し振ちやありませんか。貴女は僕が怖いんですね」

「ええ」

「何故です、それは」

「解りません」

ラヴレツキーは口を噤んでしまつた。

「どうです」と暫らくして彼は口を切つて『まだお定めなさんのですか』

「何をですか？」リーザは目を上げないで云つた。

「解つてる筈です」

見る間にリーザは眞赤になつて、

「何にも訊いてくださいますな」と逆上氣味に叫んで、『妾には何にも解らないのです。妾自分には何も知らないんですもの』かう云ひさま彼女は行つてしまつた。

翌日ラヴレツキーは正餐の後でカリーチン家を訪ねると、何だか晩の神事の準備が萬事出来て居る様子で、食堂の隅に眞白な卓掛を掛けた四角な卓が据ゑてあつて、その上に金縁にはめた、さまざまの色の寶玉で後光を飾つた聖像が立てかけて置かれてある。鼠色の着物を着て靴を穿いた年寄の召使が、音も立てずゆるやかに部屋の中を彼方此方歩き廻り、聖像の前の細い燭臺に蠟燭を二本立て十字を切り、頭を下げて、徐に出て行つた。客間は暗くて空虚であつた。ラヴレツキーは食堂へ入つて行つて、今日は何方かの命名日にでも當るのかと訊ねた。(ロシアでは誕生日を祝はずに命名日を祝ふ事になつて居る。譯者註)

人々は小聲で否と答へて、今晚の神事はリサウータ・ミハローヅナ様とマルファ・チモフエヅナ様の御望で調へられたので、ある靈驗な聖像を招じたいと云ふ譯であつたが、聖像は三十ヅエルストも遠くの或る病人の所へ行かれたので此處へは見えられぬのだと云ふ事を話した。やがて坊さんが助祭を幾人も隨へてやつ

て來た。年はもう若い方ではなく、大きな禿頭を光らせて居る。玄關へ入ると大きな咳拂ひをした。と、婦人連がぞろぞろ居間々々から出て來て、坊さんの祝福を受ける爲めに次々に進み出た。ラヴレツキーは皆の人に黙禮すると、皆の人は又黙つて挨拶をした。坊さんはやゝ暫らく立つて居たが、又しても咳拂ひをして、低いバスの聲で訊ねた。

『もう始めませうかな』

『どうぞ、先生、御始めくださいまし』とマリヤ・デミトリエヅナは答へた。

坊さんは法衣を着初めた。一人の助祭は慌てゝ、うやくしげに火種を求めた。やがて香の匂がし出した。下女下男は玄關から出て來て戸口にごちやく集つた。二階から下りた事のないロスカまでが突然食堂へ駆け込んだ。一同はそれを追ひ立てた。犬は驚いて一旦飛び出したが、又中へ入つて來てきちんと坐つた。馬丁はそれを摘み上げて、持つて行つた。

晩の神事が初まつた。ラヴレッキは隅の方に縮こまつて居た。彼の胸には何とも得體の知れぬ、殆んど楽しいと云つたやうな情緒が動いた。自分に自分の感情が解らなかつた。マリヤ・デミトリエヴナは一番前の椅子の前に立つて居たが、いかにも大家の奥様然とした、ものうさうな、鷹揚な態度で十字を切り、一寸周囲を見廻すかと思ふと、直に又眼を天井に向けた。いかにも迷惑さうな所が見えた。マルファ・チモフエヴナは惱まじげな様子をして居た。ナスターシヤ・カイルボヅナは地面へひれ伏して、衣擦の音を憚かるやうに、つゝましやかに立ち上つた。リーザは身動きもせず自分の場所に立つて居た。その一心になつた顔付を見てもいかに熱心に、いかに根強く祈を捧げて居るか解る。神事が終つて十字架を拜む時に、リーザは又坊さんの大きな赤い手に接吻した。マリヤ・デミトリエヴナは茶の席へ坊さんを招じた。坊さんは法衣を脱ぎ幾分世間的の様子になり、婦人連と一緒に客間へ通つた。餘り晴々しくない會話が初まつた。坊

さんは茶を四杯飲んだ。絶えず禿頭を手巾で拭いて居る。彼はさまざまな話の中で、アポシユニエフと云ふ商人が寺の圓天井を鍍金する爲めに七百ルーブル寄附したと云ふ事を話し、痣の妙薬を皆に教へてくれた。ラヴレッキはリーザの近くへ坐らうと試みたが、リーザの様子がひどく嚴格で、どちらかと云ふと峻厳と云つても好い程であつた。そして一度も此方を見なかつた。わざと此方を見やうとしないらしく思はれた。一種の冷たい嚴肅な心熱が彼女の心を領して居るらしい。ラヴレッキは如何かして笑顔で氣をまぎらすやうな事が云つて見たかつたが胸の中が妙にこんぐらかつて、終には得知れぬ心の惑にすら沈んだ……彼はリーザの心の中には何か知ら自分の力の及び得ない物があるやうな氣がした。其後又ラヴレッキは客間に坐つて、例のゲデオーノヴスキの狡い、長たらしい饒舌を聴いて居た。と、突然、何故か分らずに後を振り向くと、思ひがけなく、深味のある、一心に何か問ひつめるやうなリーザの眼が自分を見て居た。ラ

ヴレツキーは終夜その事を思ひつづけた。彼の戀は子供のやうではない。溜息や懊惱は彼の柄ではなかつた。リーザとてもそんな風な熱情を彼の心に起さずやうな事はなかつた。が、年齢の如何に拘らず、戀には苦しみは附物である。彼と雖も全く苦しみの外に出る事は出来なかつた。

三十三

或日例のやうにラヴレツキーはカリーチン家を訪ねた。晝のひどく暑かつたのに引きかへて、殊の外氣持の好い晩であつた。流石風通し嫌ひのマリヤ・デミトリエヅナも、その晩は珍らしく庭に面した戸と云ふ戸、窓と云ふ窓を残らず明けさせ、加之に今夜は骨牌はしない、こんな佳い時に骨牌をするのは罪だ、かう云ふ時こそ眞實に自然の美を樂しまなければならぬ、と云ふやうな事まで云つた。客はバンシンだけであつた。彼は夕の美しさに心動かされて、一種の藝術的な情

調が身内を流れるやうに感じたが、それかと云つてラヴレツキーの前では歌を歌ふ氣にもなれぬので、せめてもの事に詩を讀み耽つた、而も聲高に好く讀んだ。たゞ餘りに故意に過ぎ、いらぬ艶をつけ過ぎる嫌があつた。詩は(その頃ブーシキンがまだ流行らなかつたので)レルモントフの數篇であつた。ふと、バンシンは自分の熱した事がきまり悪くなつたと見えて、『思ひ』と云ふ有名なレルモントフの詩に因んで、新時代を攻撃し始めた。彼はその攻撃の間々に機會を見つけては、若し自分に權力さへあれば、きつと自分の思ふ通りにあらゆる事を改めて見せると云ふ意味の事を述べた。彼は云ふ。『ロシアはヨーロッパ諸國の背後に落ちた。吾々はそれを引き上げにやならぬのだ。吾々の國はまだ若いのだと云ふ人が多いが、そんな事は凡て無意味だ。のみならず吾々には何等發明の才がない。コマコフが明言した如く、吾々は捕鼠器一つ發明した事がない。随つて否應なしに吾々は他から借りて來なければならぬのだ。』吾等は病みてあり」とレルモントフ

は云つたが、僕もそれには同感だ。併し吾々の病む所以は、半分だけしかヨーロッパ人になつて居ないからだ。吾々は自分に噛みついた犬の毛を取らなければならぬ。つまり吾々を傷つけたもので、吾々の傷を癒さにやらぬのだ。』(ル、カダストル)とラヴレツキーは心で思つた。(バンシンは更に言葉を次いで言つた。『吾々の中の識者、即ち「レ、メーニール、テート」は、既に久しい以前からのやうに信じて居たのだ。根本に於ては萬人皆ひとしい。たゞ彼等の間に善い制度を紹介すれば、それで事足りるのだ。無論現在の國民生活に適應さすと云ふ事がなげりやならぬ。それがつまり吾々の仕事——即ち官にある者の仕事なのだ。(彼は「官にある」と云ふ言葉を殆ど「支配權を握る」と云ふ程の意味に云つた)さうは云ふものゝ必要を生じた場合には、何も心配する事はない。制度は生活そのものをも變形させるのだ』

以上述べたバンシンの意見は、ひどくマリヤ・デミトリエヴナの意に適つた。

『何てまあ物の解つた人だらう。而もそれが此家の客間での話なんだから』と彼女が思つた。リーザは窓に背をもたせて無言のまゝ座つて居た。ラヴレツキーも口を利かなかつた。マリヤ・チモフエヅナは隅の方で年寄友達と骨牌をしながら、何か彼が獨でブツ／＼云つて居た。バンシンは部屋の中を彼方此方歩きながら、流暢に辨じ立てゝ居たが、心中大に平かならざるものがあつた。彼の罵るのは新時代全體ではなくて、自分の知つた数人だけのやうであつた。

カリーチン家の庭のライラックの繁みの奥に、以前から一羽の夜、鶯が巢を喰つて居た。その鳴き初めの夜の歌が、バンシンの流暢な辯舌の絶間々々に聞かれた。ちつと動かぬ菩提樹の梢を越えて見える蒼薇色の空には、逸早い星の光がまたゝき初めた。と、ラヴレツキーは立ち上つて、バンシンの云ふ事に答へかけた。とう／＼議論が初まつたのだ。ラヴレツキーは若きロシアとロシアの獨立の爲に辯護した。彼は將に自己を捨て、時代を捨てゝしまはうとして居たのだが、

而もなほ此の場合新人の味方となり、彼等の信念と彼等の欲求の味方となつた。パンシンは鋭く且激越した調子でそれに應じた。彼は聰明な人々が一切の事を變更せなければならぬと云ふ事を主張し、つひには侍従官としての自分の地位や官吏としての自分の経歴も何も忘れて、ラヴレッキーを時代後れの保守主義者と呼び、甚だしきはその社會上の地位の疑はしい點までも指摘する程になつた。が、ラヴレッキーは我を忘れるまでに激しめせず、又聲を高くするやうな事もなかつた。彼はミハーレヴィイチも自分を時代後れだとか、時代後れのホルテール派だとか云つた事のあるのを思ひ出しながら、凡ての點からパンシンの説を冷靜に辯駁しつづけた。母國に關して何等知る所もなく、又何等の理想に對する確たる信念もなく、さればとて強固にそれを否定する程の根底もなくして、徒らに突飛な飛躍を試みる事や、又無暗に上から改革を強ひる事や、それ等は皆實行しがたい空想である事を、ラヴレッキーは一々事實について説いた。更にその實例と

して彼は自分の受けた教育について述べ、何よりも先にすべき事は民衆の眞精神を認めて、それに従ふ事であつて、それなくしては如何に勇敢に虚妄に對して戦はうとしても到底不可能の事であると説いた。最後に於て彼は時と力の無謀なる浪費に對する否難を、十分理のある事として是認した。

『いかにも御尤』とパンシンは終に叫んだ。大分氣を焦立てゝ居る『所で貴方は今ロシヤへ歸つて御出になつた。で、如何云ふ事をなさいます御計畫ですか』
『土地を耕します』とラヴレッキーは答へて、『而も出来るだけ好くそれを耕さうと思ふんです』

『そりやどうも結構な事ですなア』とパンシンは答へて、『貴方は最うその方面の事では随分御成功なすつてゐらつしやると聞いて居りましたが、それにしても然う云ふ方の事は誰にでも出来ることと云ふ譯でない事は貴方も御認めなさらぬ譯にはまゐりませんでせうな』

『ユヌ ナチュール ポエティック(詩人肌)では、ねえ』とマリヤ・デミトリエヴナが口を出して、『とても耕す事なんか出来はしませんよ。……エ ビエイ(どうせ)何事もオン グラン(まりは)貴方が爲さるなければならぬですわ、ねえウラヂーミル・ニコライチさん』

これには流石のバンシンも面喰つて、極り悪さに話頭を轉じた。彼は話を星空の美しさに移し、シユーベルトの音楽に移さうとしたが、一向効目がなかつた。で結局ピケット(骨牌遊びの一種)の勝負をマリヤ・デミトリエヴナに挑んで、それで片がついた。マリヤ・デミトリエヴナは『まあ、こんな晩に?』と軽く拒んで見たが、彌張しまひには骨牌を持つて來させた。バンシンは大きな音を立て、骨牌の新しい包を裂いた。リーザとラヴレッキは云ひ合せたやうに席を立つて、マルファ・チモフェヴナの近くへ行つて座を占めた。と、二人は斯うやつて二人限で居るのが幾分氣遣はしいとまで思ふ程に嬉しい思に打たれた。そ

れと同時に二人は此の四五日御互に感じて居た苦しい思が最う二人の間からは消え去つて二度と戻つて來ないのだと云ふやうな氣がした。老婦人マルファ・チモフェヴナはこつそりとラヴレッキの頬を突衝いて一寸意地悪さうな眼をして見せ、首を一二度振つて、小聲で、『うまく彼の才子をやり込めたもんだよ』と云つた。部屋の中はひつそりとして、物の音と云つては、蠟燭のバチ／＼云ふ微かな音と、時々卓を叩く手の音と、骨牌の點を呼んだり數へたりする聲と、それから夜鶯の豊かな歌聲と、それだけであつた。力の籠つた、裂くやうな快い夜鶯の歌は、露を帯びて生々した夜の氣と溶け合つて、絶間なく窓から流れ込んだ。

三十四

リーザはラヴレッキとバンシンとの間に議論が戦はされて居るうちは、一言も口を利かなかつたが、併し心を籠めてそれを聴いて居た。そして徹頭徹尾ラヴ

レツキーの方に同情して居た。政治上の事は一向面白くなかつたが、それにしても俗吏めいた横柄な調子（バンシンは今迄は少しもそんな風を見せなかつたのだが）は堪らなく厭な氣がした。加之に無暗とロシヤを侮蔑するのが、ひどくリーザの感情を害した。リーザとても今迄一度も愛國者となるやうな心を起した事はないのだが、でも情は常にロシヤの國民と共にあるのだし随つてロシヤ風の心は何となく彼女には快かつた。母の領地の監督などが町へ出て来るやうな事があると、リーザは打ちくつろいで幾時間でも話相手となつて、自分と同等の者に對するやうに聊かたりとも目上顔をした事がない。ラヴレツキーはさう云つたリーザの性質はよく呑み込んで居た。随つてバンシンに對する言葉も、バンシンその人に云ふ爲めに氣を遣つたのではなく、リーザを主にして云つて居たのだ。二人は互に一言も言葉を交さず、眼を見合す事すら稀であつた。併し二人は其の晩親密の度を加へた事をお互に知つた。吾が好む所彼又好み、わが惡む所彼又惡むと云

ふ事もお互に分り合つた。二人は餘す所只一つの點に於て一致しないのみである。だがリーザの方ではいつかは男を神に連れ戻さうと心密に希つて居た。二人は今マルファ・チモフエヅナの傍に坐つて骨牌を見て居る様な風をした。事實二人は骨牌を見て居たのだ。併しその間にも二人の心は充實し切つて、何物をも感じ逃すやうな事はなかつた——夜は二人の爲めに歌ひ、星は二人の爲めに輝き、樹は二人の爲めに呷き、夏の夜の温かさよふくよかさに抱かれて眠り鎮まつて居る。ラヴレツキーは燃え上る情念のまゝに身も心も打ちまかせて、ひたすら嬉しい思に驅られて居た。併し少女リーザの純白な胸の中にどんな思が往來して居たかは、とても言葉では云ひ盡せない。彼女自身にとつて既にそれは一個の神秘であつた。然り何人にもそれを神秘として存せしめよ。かの生と發育との運命を擔へる穀粒が、地の底にあつて如何に膨大し如何に熟し行くかを、誰か知る者があらう、誰か見た者があらう、又誰か未來に於て見るものがあらう。

十時が鳴つた。マルファ・チモフエヅナはナスターシャ・カールボヅナと共に、立つて自分の部屋へ去つた。ラヴレッキとリーザは部屋を突切つて、庭へ通する戸口に立ち留り、暗の奥を見透し、やがて互に顔を見合つて、こりした。二人は互に手を執り合つて、心行くまで胸の思を語り合ひたかつたらしい。が、やがてマリヤ・デミトリエヅナとバンシンの居る所へ戻つて来た。そこでは骨牌がまだ盛に戦はされて居る最中であつた。と、つひに最後の王の呼聲がかゝつた。女主人は吐息をするやら唸るやら大騒ぎをやつて、立派な布團をつけた安樂椅子から起上つた。バンシンは帽子を取り、マリヤ・デミトリエヅナの手に接吻をして、幸福な人達はこれで最う眠ても一向差支へないが、自分はこれから又愚にもつかぬ書類と首引で徹夜しなければならんだと云ひながら出て行つた。但しリーザに對しては、いかにも冷淡に頭を下げたゞけであつた。實は彼も自分の求婚がこんなな返事を長引かされやうとは豫期しなかつたので、その爲めリー

ザとの仲も妙になつたのだ。ラヴレッキもバンシンにつゞいて違を告げた。二人は門で別れた。バンシンは馭者の傍へ行つて、頸をステツキの尖端で突つて目を覺させ、直に車に飛び乗て驅け去つた。ラヴレッキは家へは歸りたくなかつたので、町を抜けて郊外の平野へ出た、月はなかつたが、夜は静かに澄み波つて居た。ラヴレッキはやゝ暫く露に濡れた草原をうろつき廻つた。と、狭い徑へ出たので、今度はそれについて歩いた。徑の先は長い生垣に通じ、小さい門に通じた。彼は何の氣なしに門を押開けて見た。微かな音を立て、門は開いた。何だか自分の手の觸れるのを待つてゝも居たやうだ。菩提樹の蔭道を傳つて五六歩進んだと思ふ頃、彼は驚いて立ち留まつた。カーリーチン家の庭だつたのだ。つと彼は榛樹の繁みから投げられた黒い影の中へ身を寄せて、あまりの駭きに肩を震はせながら、身動もせずやゝ暫く其處に立ちつくした。『こりや唯事ぢやない。何かの引合せに違ひない』と彼は思つた。

あらゆる物、悉く息をひそめてしんとして居た。家の方からは何の音も聞えて来なかつた。彼はおつ／＼前へ進んだ。並木路の曲り角まで行くと、突如として家の全景が暗い面を彼の前に現はした。二階の窓が二つだけ明りが射して居る。リーザの部屋では、白い窓掛の蔭に蠟燭の火が點つて居り、マルファ・チモフエヅナの寢室では、聖像の前に赤い火のランプが輝いて居る。そしてその光が同じ位の光度を以て金縁に反射して居た。階下ではバルコニーに通ずる戸がぱくんと開いて居る。ラヴレツキーは木の腰掛に腰を下して、肱杖を突いて、その開いた戸口とリーザの窓とを等分に見つめた。町で夜半の鐘が鳴り、家の中では小さい時計が鋭い音を立て、十二時を打ち、夜番はけたましく板を叩いた。ラヴレツキーは何を思ふでもなく、何を待ち設けるでもなく、たゞ斯うやつてリーザの近くに居り、リーザの庭の、而も彼女が幾度も腰を掛けた腰掛に腰掛けて居るのが堪らなく楽しかつた。

リーザの部屋の明が消えた。

『よく御休み』とラヴレツキーは獨語つて、彌張動かずに坐つて居た。彼の眼はちつと暗くなつた窓を見つめた。

と、突然階下の一つの窓から燈火が現はれて、やがて次の窓へ移り、見る間に又その次の窓へと移つた。誰か蠟燭をつけて部屋を歩いて居るのだ。『リーザぢやないかな。いやそんな事はない』かう思つて、ラヴレツキーは起ち上つた。と、眼に親しい顔がちらと見えた。リーザが客間へ入つて行つたのだ。眞白な寛衣を着て編んだ髪がゆるんで肩に懸つて居る。彼女は静に卓へ近寄り、伸しかゝるやうにして、その上に蠟燭を置き、何か知ら見はじめた。と、やがて庭の方へ向き、開け放しの戸口へ行つて、闕の上に立つた。身軽なすらりとした姿が眞白に浮出て見えた。ラヴレツキーはぞつとした。

『リーザさん』やつと聞えるか聞えぬ位の聲が彼の唇を衝いて出た。

リーザは驚いて暗の中を見つめ初めた。

『リーザさん』ラヴレツキーはやゝ聲高に繰り返した。そして植込の影から出た。リーザは驚いて首を上げ思はず後ずさりした。彼女には聲の主がラヴレツキーだと分つた。ラヴレツキーは三度リーザを呼んで、両手をその方へ伸べた。リーザは戸口を出て庭へ下りた。

『貴方でしたの』と彼女は云つた。『まあ貴方でしたの』

『僕——僕です——御話したい事があるんです』とラヴレツキーは叫いて手を引きながら腰掛の所まで連れ出した。

女は逆はずについて来た。蒼白いその顔、見据ゑたその眼、凡ての振舞の上に云ふに云はれぬ當惑さが見えた。ラヴレツキーは女を腰掛けさせて、その前に立つた。

『僕は別に此處へ来る氣がなかつたんですがね』と彼は口を切つて、『何か知ら僕

を連れて来たんです……僕は——僕は貴女に戀してるんです』抑へ難い恐怖の念に驅られながら彼は云つた。

リーザは徐ろに彼を見た。何だかその瞬間初めて自分の居る場所、起りつゝある事が解つたと云ふ様子であつた。起ち上らうとしたが、それも出来ず、両手で顔を蔽うてしまつた。

『リーザさん』とラヴレツキーは小聲で呼び、『リーザさん』と繰り返して、その足下に膝まづいた。

女の肩は軽く波打ち初め、蒼白い両手の指は更にしつかりと顔に押し當てられた。

『如何したんです？』とラヴレツキーはなじつて見た。抑へつけて居るやうな歎歎の聲が聞えた。彼の心は静まつた……彼にはその涙の意味が好く解つたのだ。『貴女も僕を思つてくださるんですか』と、叫いて女の膝を撫でよやつた。

『起つてください』と云ふ女の聲が聞えた。『どうぞ起つてくださいいな、フェードル・イワーニチ。妾達は何をして居るんでせう』

彼は起ち上つて、女と並んで腰掛に坐つた。女は最う泣いて居なかつた。そして濡れた眼で凝と男を見つめた。

『びつくりしましたわ。妾達は何をしてるんでせう』とリーザは再び云つた。

『僕は貴女に戀してゐるんです』と男も前と同じ事を云つた。『僕の全生命を貴女に捧げる覺悟なんです』

リーザは何物にか刺されでもしたやうに、又しても身震して、眼を空の方へ向けた。

『何もかも神様の御手にあるんですから』と彼女は云つた。

『でも貴女は僕を思つてくださいるんですか。さうだと二人はどんなにか幸福になれるでせう』

女は眼を下へ向けて、徐ろに男の方へ身體を近寄せて、頭を男の肩に埋めた。男は一寸首を屈めて、女の冷たい唇に觸れた。

半時間の後には、ラヴレッチャは小さい庭の門の前に起つて居た。見ると錠が下りて居るので、止むを得ず垣を乗り越えた。彼は再び町へ戻つて、眠つた街道を歩いた。非常に大きな、思ひがけない幸福が心を充たした。あらゆる懷疑は今や全く消え失せた。『去れよ、過去の死骸』かう彼は思つた。『彼女は俺を思つて居る。もう俺のものだ』と、自分の頭上に何か知らず勝利の樂の音が漂ひ去り漂ひ来るやうな氣がした。彼は立ち留つた。樂の音は更に高く更に賑はしく鳴り響いた。偉大なる樂調の流——その流の中に、あらゆる彼の幸福が語られ歌はれて居る。彼は四邊を見廻した。音樂はとある小さい家の二階の二つの窓から漂うて來るのであつた。

『レムさん!』かう叫んで彼はその家の戸口へ駆け寄つた。『レムさん! レムさ

ん！」彼は聲高く繰り返した。

音が止んで、寛衣を着た老人が襟も着けず髪も梳かさぬ取り亂した様子で窓へ現はれた。

「あゝ」と容態振つて云つて、「貴方ですか」

「クリストファ・フェードリツチ！ 素敵な音楽ですね。どうぞ僕も入れてくれ
たまへ」

老人は一言も口を利かずに窓から大袈裟に手を差し出して往來口の鍵を外した
ラヴレツキは慌てゝ二階へ上り、部屋へ入りさま、レムに飛びつかうとした。
が、レムは禮儀正しく客を椅子に招じて、急ぎ込むやうにロシア語で云つた。

「どうぞお掛けなすつて御聴きくださるやうに」かう云つて又してもピアノに
向ひ、いかにも誇らしげに且眞面目さうに四邊を見廻しながら、弾き初めた。ラ
ヴレツキは久し振でかう云ふ音楽を聴いた。弾き初めから最う堪らなく情熱に

充ちた音律が胸の底へ流れ込んだ。靈感と幸福と美とがいよゝ高まりいよゝ
熱し、うねりつ溶けつし行く樂の流は、地上にありとある貴きもの、神秘なるも
の、聖きものに觸れ行くやうに感じられた。それは又果つる期なき悲みの氣を吸
ひて、天へ高く消えつゝも上り行くやうにも思はれた。ラヴレツキは身を締め
て起ち上つた。恍惚とした彼は冷たく蒼白く、まるで死んだものゝやうに身動も
せず突立つて居た。今し方戀の歡樂に掻き亂された彼の心は、今は此の音楽に攫
み了せられ、音楽は又戀を誘うて更に熱し更に熱した。

「今一度！」最後のコードが鳴り響くや否やラヴレツキはかう叫びた。

老人は驚のやうな鋭い眼付で相手を見て、胸を叩きながら、ねち／＼した口調
でドイツ語で斯う云つた。

「これは私の作です。私もこれでは大音楽家ですね」
その言葉の下から再びその驚くべき名作を弾いた。部屋には蠟燭がなかつた。

上りかけた月の光が斜に窓を照し、ふくよかな空気が樂の音の力で生氣づき、此のみすばらしい小さな部屋も何か聖い場所のやうに見え、半面に銀色の光を受け、老人の頭はいかにもけだかい、此世ならぬものゝやうに見えた。ラヴレッキーは思はず近寄つて、抱きついた。初めは老人の方でそれに應ずるところでなく、却つて眩でそれを押し退けた。そしてやゝ暫く身動もせず、その眞面目な、どちらかと云へば氣むづかしさうな顔を續けて、たゞ僅に二度ばかり『あはあ』と唸るやうな聲を出したゞけであつた。が、とうとう顔の皺がゆるみ、だんぐりと顔付が變つて和らいで來た。で先づラヴレッキーの情の籠つた祝意に應じて、一寸笑顔を洩らし、やがてそれが涙と溢れて、まるで子供のやうに弱くなつてしく泣き出した。

『不思議ですね』と彼は云つて、『貴方が丁度此處へ來られたと云ふのは、實に不思議です。ですが私には好く解つとる、よく解つとるのです』

『解つてると云ふんですか』とラヴレッキーは驚いて問ひ返した。

『貴方は私の音楽をお聴きくださった』とレムは答へて、『私に何もかも貴方の事が解つてると云ふ事は、あの音楽でお解りになりませうがな』

夜映までラヴレッキーは眠れなかつた。彼は終夜寢床の上に坐つたまゝで居た。リーザも同じく眠れなかつた。そして祈りつゞけて居た。

三十五

ラヴレッキーの生ひ立ちや教育については既に述べた。こゝにはリーザの教育について少しばかり述べて置かう。リーザが父に別れたのは十の時であつたが、父は存命中リーザの事は少しも氣にかけて居なかつた。仕事の心配に壓迫され、財産を殖やす事ばかりを氣に懸ける、膽汁質な、鋭い、短氣な父ではあつたが、併し教師や家庭教師や、着物や、その他子供に必要な物には惜まずに金を出

した。それで居て彼の所謂「ぎやあ〜」吠える奴をのやす」やうな事はとても出来なかつた。實際彼にはそんな餘裕がなかつたのだ。彼は働いただけで、仕事を休むやうな事はなく、眠る事も少なく骨牌をとるやうな事も稀で、たゞ最う働いた。彼は自分をいつも打穀機をつけた馬に比べて居た。「私の一生もわけなくお終になつちまつた」口にやけた唇邊に微笑を浮べながら、かう彼は臨終の床で云つた。

その夫にも劣らず母のマリヤ・デミトリエヴナもリーザの事にはあまり氣を揉まなかつた。その癖ラヴレツキーになんか向ふといかにも自分一人の手で子供を教育したやうに吹き立てるのだ。母はリーザを人形のやうに着飾らせて、客の前などではいつも頭を撫で、家の娘は慇懃だとか可愛いとか云つて居たが、但しそれだけに過ぎなかつた。絶えず氣をつけて育てるなど云ふ事は、要するに怠惰者の夫人には、あまりに面倒臭過ぎたのだ。父の存命中リーザは、フランスから来たモーロー嬢と云ふ女傳に任されて居たが、父の死後はマルファ・チモフェヴナの手

に移された。マルファ・チモフェヴナの事は前にも述べたが、モーロー嬢の方は、何でも皺くちやな小柄の女で、妙に處女のやうな振舞をし、處女のやうな性質を持つて居た。若い頃は随分放縱な生活をしたさうだが、年寄つてからは、只もう二つの煩惱があるだけだ。その二つの煩惱と云ふのは、大食をする事と、骨牌をする事だ。たらふく食つた揚句に、骨牌もせずお喋舌もしないで居ると、いつも顔色がまるで死人のやうになつた。ちやんと坐つて、ちつど何かを見つめて、盛に息をして居る——その癖頭の中には何の考もないのだ。さうかと云つて人が善いとも云へさうにない。由來老嬢は人の善いものではないのだが、かてゝ加へて此の女には若い頃の放縱な生活と子供の頃から吸つて居たバリーの空氣の結果として、何に對しても一種の懷疑的な考が付き纏うて居て、口癖のやうに「ツッサセ デ ベチス」(そんな事は)と云ふやうな事を云ふ。話は至つて語法に合はない言葉が多いが、それでも純粹のバリー辯だ。それに陰口は云はずむら氣が

ない。女傅としてはまあそれ以上の事は望まなくても好いわけなのだ。此の女のリーザに及ぼした感化は至極僅なものであつた。此の女などよりは遙に、乳母のアガーフイヤー・ヴラーシエヅナの感化の方が大きかつたのだ。

此の女（アガーフイヤー・ヴラーシエヅナ）の身の上は有名なものである。百姓の家の生れで、十六の年に矢張或百姓の所へ嫁入した。が、世間の百姓女とはひどく懸け離れた性質の女であつた。父は二十年も地方の百姓頭をして居て、金も餘程溜めたが、そんな風で却て娘をあまやかし損ねたのだ。娘は至つて器量美しで、その地方中での美装娘で、何かに氣が利いて、口も達者膽玉も大きい方であつた。主人のデミートリ・ペストフ（マリヤ・デミートリエヅナの父）は温なしく優しい人であつたが、一日打穀場で其の女を見て話をしてからと云ふものは、實に熱烈な戀に陥つてしまつた。所が、それから間もなく女が寡婦になつたので、ペストフは自分に妻のあるのも構はず、それを家へ連れて来て、奥様風に粧り

上げた。アガーフイヤーの方でも直に自分の新しい地位に適應するやうになり、まるでこれまで異つた生活をして居た者と思へぬ程になつた。かくて日に美しく且肉付も好くなり、モスリンの袖に包んだ腕などは、まるで紳商の夫人かなどのやうに、粉のやうな白い色になつた。卓の上には茶缸のない事はなく、着物は絹か天鵝絨でなければ着ず、臥床は物の良い織物で作つた羽蒲團でなければ臥なかつた。

此の幸福な生活は五年續いたが、五年目にペストフは此の世を去つた。併し未亡人は情深い人である上に、故人を思ふ情が厚かつたので、夫の死後と雖も決してアガーフイヤーに對してつまらぬ敵意などを以て遇するやうな事はしなかつた。アガーフイヤーの方でも自分の素性を忘れるやうな事は斷じてなかつた。けれども永く傍に居るにも忍びない所から或る牧羊人と結婚させて、家を去らせてしまつた。それから三年過ぎた。と、ある夏の暑い日の事、未亡人はふと牧場を訪ねた

アガフィーヤは主人の姿を見ると、何事も止めて慇懃にもてなし、甘い冷たいクリームを出すから何やら大騒ぎをやつた。その様子の小ざつぱりとした、いかにも晴やかな、そして何事にも満足して居るやうなのを見て、未亡人はすつかり心が打ち解け、以前の事も赦して前通り家へ戻つて来るやうにと云つた。そんな風でだん／＼アガフィーヤが氣に入つて来て、それから半年も経たぬうちに、一切自分の家の家政を委せるやうにまでなつた。そこでアガフィーヤは又元の勢力を回復し彌張元のやうに肥りもし美しくもなつた。女主人は今度は、最うどん底から信用してかゝつた。かくて又五年過ぎた。不幸は再びアガフィーヤの身の上に降りかゝつた。自分の出世と共に馬丁に引き上げて貰つた亭主が、酒を飲み出し、家を明ける事が多くなり出し、終には女主人の銀の匙を六本盗んで、それを機會の見付かるまで女房の宝箱の中へ隠して置くやうな事までした。所が運悪くその箱が開かれて、其場に暇を出されて又元の牧羊人に成り下つた。で、アガフィー

ヤもひどく面目を失し、相變らず屋敷に置いて貰つては居たが今では家政上の仕事は取り上げられて、針仕事位よりさせられぬ地位へ下げられ、これ迄帽子を被つて居られたのがその時から頭巾より以上の物は被れぬ事にされてしまつた。併しアガフィーヤは自分の身に落ちかゝつた此の打撃に對して、傍の者が驚く程の忍従の態度を取つた。それは丁度彼女が三十の年で、子供は皆死んでしまつた後であつた。亭主もその後幾許もなくして此の世を去つた。彼女に取つては靜に自分を省るべき時が來たのだ。併し彼女は少しも自分を省るやうな事はしなかつた。ひどく無口になり、信心深くなつて朝の祈や教會の集りはたゞの一度も怠るやうな事がなく、おまけに今迄持つて居た美しい着物は残らず捨てしまつた。彼女はかくして五十年の間、穩かに、安らかに、そして眞面目に、決して他人と争ふやうな事なく、どんな人にも道を譲るやうにして送つた。若し人あつて罵るやうな事があると、彼女はその相手に對して頭を下げて、その忠言を謝するより

外の事はしなかつた。女主人は久しい以前に最うその勘氣をゆるして、もと通りの帽子を手づから贈つて被らせた。が、アガーフィヤの方では今となつては頭巾を脱ぐのが却つて快く思はず、彌張それを被つたまゝにして、着物も常に黒い色のばかりを着て居た。かくして女主人の死後は層一層穩かになり謙遜になつた。由來ロシヤ人はちぎに物に怖れたり、愛情を濺いだりするが、尊敬すると云ふ事がなかくない。容易に他を尊敬しないと云ふだけでなく、同時に如何なる人に對しても尊敬する事を好まぬのだ。所がアガーフィヤとなると、家中の者が皆尊敬した。そしてその舊惡などは、亡くなつた主人と一緒に土の中へでも埋めてしまつたやうに、誰一人思ひ出す者がなかつた。

カリーチンがマリヤ・デミトリエヴナの夫となつた時に、矢張アガーフィヤに家政萬端を委さうとした。併し「誘惑の故を以て」拒んだ。カリーチンはそれを責め罵つたが、アガーフィヤは平身低頭して部屋を去つた。でもカリーチンは

人を見るに明かな人であつたから、アガーフィヤをも好く解して、見捨てるやうな事はしなかつた。市へ移つてからは、當人の承知したのを幸彼女をリーザの守役にした。當時リーザはまだほんの五つの小供であつた。

リーザは初めはその新しい守役の氣むづかしい、嚴格な顔を怖れたが、直に馴染んでなつき出した。リーザとても矢張眞面目な小供であつた。容貌はいかにもカリーチンの斷乎とした規律正しい外貌を忍ばせた。たゞ眼だけが父とは違つて居て、子供には珍らしく穩かな熱心の籠つた、そしていかにも善良げな光を持つて居た。リーザは人形を持って遊ばうとはせず、又聲高く笑つたり、永い間笑ひつゞけたりするやうな事はなく、立居振舞がひどく禮儀正しい方であつた。めつたに物思ひに沈むやうな事がなかつたが、たまにそんな時があつても、大概の場合には正常な理由があつた。そして暫く黙つて考へ込んで居るかと思ふと、今度は誰か知ら大人に向つて、腦が何等かの新しい印象を受けて働いて居ると云ふ事を示

すやうな疑問を發するのが常であつた。幼い舌纏れの時期が非常に早く濟んで、四つの時には最う明瞭物を云つた。父に對しては怖がつたが、母に對する情は至つて曖昧で、怖がると云ふのでもなく、又特に懐くと云ふのでもなかつた。唯一人の氣に入りのアガーフイアに對してすら、殊更懐くと云ふ風はなかつた。でもアガーフイアは決して傍を離れるやうな事はなく、二人一緒に居る様子の可笑しい事と云つたらなかつた。アガーフイアは何もかも黒い物づくめで、頭の中まで黒いのに、顔は瘦せて居て蠟のやうに透き徹つて居た。それでも美しい事は彌張美しく表情にも富んで居た。そのアガーフイアがいつも身體を真直にして椅子に腰掛けながら靴下を編んで居ると、リーザはその足下の小さな肱掛椅子に腰掛けて矢張何か一心に仕事をして居る。そしていかにも眞面目さうに澄んだ眼を上へ向て、アガーフイアの話に聴き入るのであつた。アガーフイアの話は別に面白いお伽物語ではなく、話の調子までも改めてかゝるやうな聖母傳や、さまざまの隠

者、聖人、聖徒などの傳記であつた。聖徒が砂漠に住んで居た様子、衆生を濟度した事蹟、飢渴に苦しみ窮乏に陥りつゝも王を怖れずにキリストの御名を明した事、それから空の鳥が彼等に食をもちたらし、野の獸が彼等の教を聴問し、花が彼等の血の滴つた所から咲き出た事、それらの事をアガーフイアは話した。『その花がにほひあらせいとうなの？』と或日リーザは非常に花が好きなのから訊ねた。アガーフイアはまるで自分などはさう云ふ尊い神聖な言葉を口にする値のない者だと云ふやうに、嚴格な謙遜した態度でリーザに其事を話して聴かせた。リーザは一心に聴いた。遍く見たまひ、遍く知り給ふ神の御姿が、一種美妙なる力を以て彼女の心の底の底までも沁み込んで、潔い尊い畏敬の念を漲ぎらせた。その代りキリストと云ふ御方が何となく自分に近い、好く知つた、殆んど親しいとまで云ひたい程になつて來た。アガーフイアは又彼女にお祈りをする事を教へた。時には朝早くリーザを起して、大急ぎで着物を着更へさせて、こつそり朝拜に連れ

出す事もあつた。リーザは爪先立て、殆んど息を凝らして蹤いて行つた。夜明の冷たさと黎明の色、寺の中の人氣のない新鮮な感じ、思がけない外出の秘密、それからおづ／＼家へ歸つて小さな床へ入る時の心持、凡てそれらの禁じられた、不思議な、而も神聖な印象の數々が一つに溶け合つて、少女の心を燃え立たせ、その性情の奥の奥までも沁み入つた。アガーフィヤは何人をも責めると云ふやうな事のない女で、リーザに對してもむづかるのを叱つた事がなかつた。何面白くない事があつても、たゞ口を利かないだけであつた。リーザはその沈黙を好く飲み込んで居て、アガーフィヤがマリヤ・デミトリエヴナとかカリリーチンとか、つまり他の人達に對して不機嫌な事があるのすらも、子供の直觀の素早さで、やんと知つて居た。こんな風で三年以上もアガーフィヤはリーザに侍へて居たがやがてモーロー嬢がそれに代る事となつた。併し其つまらぬフランス婦人は、冷やか態度と「そんな事は凡てつまらない」と云ふやうな言草とを以てして、つひ

にかの懐しい守役の面影をリーザの胸から取り去る事が出来なかつた。その人の手からリーザの胸に蒔かれた種は又深く／＼根ざして居た。それによしアガーフィヤがリーザに仕へる事がなくなつたにせよ、彌張同じ家に居て、以前と同じ調子で屢々面倒を見てくれて居たのだ。

だが如何云ふものか、アガーフィヤがカリリーチン家へ來た抑々から、アルファ・チモフエヴナとの間が面白く行かなかつた。嘗ては百姓女の雑色のスカートを着けて居た分際で、いやに固ぐるしく品振つて居ると云ふのが、短氣で我儘な其の老婦人を不快ならしめた第一の理由なのだ。アガーフィヤはやがて靈地巡拜に出して貰ひたいと願つて家を出たまゝ、再び歸つては來なかつた。何でも或門徒の僧庵へ行つたのだと云ふやうな曖昧な噂も立つた。が、兎に角リーザの心に殘した彼女の印象は決して消えなかつた。リーザは相變らずお祭にでも行くやうな調子で教會の集へ行き、楽しい思、抑へに抑へて顔を恥しさうにする程

の感激の極まつた思で祈つた。それにはマリヤ・デミトリエヅナも心竊に驚いて居たし、少しもこれまでリーザを制するやうな事になかつたマルファ・チモフエヅナまでがその熱心を和めやうとして、祈りをする時に無暗と頭を地面へ喰付けるのは好くない、そんな事は貴婦人のする事ではない、そんな事を云つた。リーザは學問の方も好く忍耐して勉強した。彼女には飛び離れて勝れた才能がなく、智力も左程秀れては居なかつた。何事も努力なしには成功し得なかつた。ピアノが好く出来たとは云ふものゝ、それもレムを除いてどれ程努めた結果であるか解らなかつた。書物を讀む事が少なく、又「自分の言葉」と云ふものにも乏しかつたが、自分の考に相當に持つて居り、自ら行かうとする方向へ進んだ彼女が父に似て居ると云ふのは單に外見ばかりでなく、自分の爲る事について他人の忠言を耳に入れない所などはそつくりであつた。隨て十九才の今日までいかにも落ち着いた育ち方をして來た。彼女は又非常に美しく可愛い娘であつたが、

自分では少しもそれを意識して居なかつた。凡ての動作が自然な、いくらか粗野な所のある程に眞面目で、聲は汚れない青春の氣の充ちた、丁度銀鈴でも振るやうに澄んで居て、唇元には至極少い快樂の情が何とも云へぬ魅力のある微笑を起させ、それが燃えて居るやうな光のある眼に、深味のある輝きと、得知れぬ甘味を添へた。發聲の念と他を害する事に對する恐怖の念とが心のどん底までも沁み込んで居る上に、持つて生れた慈悲深い柔しい情が加はつて、彼女は凡ての人を愛して、特に誰を愛すると云ふ事がなかつた。たゞ神に對してだけは、彼女も熱烈な、おづくした、而も柔い情の限りを傾けて愛した。ラヴレツキーは實に彼女が此の平和な内面生活を亂した最初の人であつた。リーザは要するにこのやうな女であつたのだ。

前の事のあつた翌日十二時にラヴレツキーはカーリーチン家へと出掛けた。途中でバンシンに出遇つたが、バンシンの方では乗つて居る馬を驅けらせて擦れ違ひざま、帽子を眉毛の所まで引き下げた。カーリーチン家へ行くと、知り合ひになつてから初めて上る事を許されなかつた。マリヤ・デミトリエヅナは「休んで」居ると云ふ事で、馬丁の告げた所によると奥様は頭痛がせられると云ふ事であつた。してマルファ・チモフェヅナとリサウエータ・ミハロヅナとは不在であつた。それでもラヴレツキーはリーザに出遇ふ事もあらうかと云ふ微な望に驅られて、ぐるりと庭を廻つた。けれど誰にも出遇はなかつた。それから二時間程して又訪ねて見たが、矢張り同じ答を得た。しかも馬丁からは妙に疑ひ深い眼を向けられた。ラヴレツキーは名残惜しくはあつたが、同じ日に三度も訪ねるのは宜しくない事と思つたので、思ひ切つてワシリエフスコーへ歸る事とした。家には仕事があるのだ。道を彼はさまざまの將來の計畫を前よりは一層好く立てて見た。

しかしかの叔母の小さい領地へ達する頃には、ラヴレツキーは一種の幽鬱な氣分に襲はれて居た。彼はアントンを捉まへて話し込んだ。爺さんは故意らしく面白くない事はかり考へて居るやうな風であつた。グラフィイーラ・ペトロヅナが臨終の際になつて自分の腕を噛んで、暫く口を噤んで居たかと思ふと、やがて「どんな人でも、ね、皆自分で自分の身を滅すにきまつて居る」と溜息と共に云つたと云ふ事を爺さんはラヴレツキーに語つた。ラヴレツキーが歸路に就いたのは、晩くなつてからであつた。前の日に聴いた音楽が妙に憶ひ出され、リーザの面影がはつきりと美しく心に映つた。彼女は俺に心があるのだと思ふと、何だか溶けるやうな柔しい心持になる。彼はその優しい心持でさまざまの思に耽つて、心がだん／＼と和げられ、嬉しい氣持になつて、再び市の小さな家へ戻つた。

玄關へ入ると先づ彼を襲つたものは平常から大嫌のバチューリの香で、見ると幾つかの嵩高な旅行鞆がそこに置いてあつた。出迎に出て來た僕の顔には、異様

な表情が見えた。どうした事かと思ひ悩みつゝ、彼は客間の鬨を跨いだ……入らうとするに長椅子から裾飾のある黒い着物を着た一人の婦人が立ち上つて、カムプリー麻の手巾を蒼白い顔に押し當てながら、二三歩進み出て、念を入れて飾つた、良い薫のする頭を屈めて、彼の足下にひれ伏した……初めてその人が分つた。その婦人は實に彼の妻だつたのだ。

彼は息を詰らせて、壁に身を寄せた。

『ねえ貴方、どうぞ妾を責めないでください』かう彼女はフランス語で云つた。その聲は彼の胸を及の如く刺した。

彼は失心したやうになつて女を見た。而もその瞬間、女が前よりも白くもなつたし、肥りもしたと云ふ事が我知らず眼に留つた。

『ねえ貴方』かう云つて女は更に言葉を續けた。時々眼を上げたり、又蓄薇色の好く磨いてある爪の、驚くべく美しい手先をしとやかに振つたりした。『ね

え、貴方、妾は貴方の御顔に泥を塗りました。眞實ひどい泥の塗り方をいたしました。いえ、それどころではありません、妾は罪を犯したのです。ですから、ねえ、お聞きください。妾は今と云ふ今は胸を裂く程に後悔して居るのです。妾自分と云ふものがつくづく悪くなりました。最上此上とても妾は自分の地位に堪へないのです。幾度妾は貴方の御傍へ歸らうと思つたか知れませんでした。でも妾は貴方の御腹立が怖ろしかつたのです。妾はこれまでの凡ての絆を断つてしまはうと覺悟しました……ピエー シエー エテ シ マラード……え、さうです、妾眞實あんなに云はれる程重ひ病氣に罹つて居たのです』かう云ひ足して額と頬を撫で、『そこで妾は自分の死んだと云ふ噂の廣がつたのを幸、何もかも捨てしまひまして、夜晝休まずに此方へ急いで参つたのです。でも貴方の前へ出るのには随分永く思案致しました……パレットル ドバン ブモン シュジ(貴方に出るの)ですけれど貴方の相變らずの御慈悲深い御心を思ひまして、とうとう此

方へ上る事に覺悟を定めたのです。御所はモスクワで知りました。あゝどうぞ妾を信じてくださいましね』かう云つて彼女は徐ろに床から起ち上り、肘掛椅子の端つこに腰を掛けながら、『度々妾は死なうかと思ひました。自分の命を取るだけの勇氣は十分にあつたのです……あゝ眞實に——妾には最う此の命が堪へがたい重荷なのですわ……ですけれど娘の事を思ひまして、あの幼ないアダの事を思ひまして、妾は死なうと思ふ心を抑へました。彼女も此方へ參つて居りまして、次の間に眠て居ります、何てまア可哀相な子でせう。彼女は疲れて居りますけれど、せめて一目見てくださいまし。少くとも彼女だけは少しも罪はないのです。あゝ妾何と云ふ不仕合な、眞實に何と云ふ不仕合なんで御座いませう！』かうラヴレツキー夫人は叫んで、涙にくれた。

ラヴレツキーは漸く我に歸つた。彼は壁から離れて、戸口の方へ向いた。

『貴方はどちらへか行らつしやるんですか』と絶望的な聲で妾は叫んだ。『そりや

あんまり御酷うございます。一言も被仰つてくださらずに、責めてさへもくださらずに。そんなに妾をお見下げあそばすのは、妾に死ねと被仰るやうなものです。あゝ怖ろしい！』

ラヴレツキーは立ち留つた。

『お前は私から如何な事を聴きたいと云ふんだ』かう彼は艶のない聲で明瞭と云ひ放つた。

『何もございません、何もございません』と妾は口早に答へて『妾には最う何も望む權利はないのでございます。妾氣だけは確なんのでございますわ。妾貴方の御救を望むのではありません。そんな大それた望は持ちません。たゞ御願ひ致した事は、此先妾にどんな事をしろとか、何處に暮せとか命じていたゞきたいのでございます。奴隸のやうに妾は最うどんな仰せにでも随ふ心なのでございます』

『私には最うお前に命するやうな事はないのだ』ラヴレツキーは相變らず艶のない

い聲で答へて、『お前も知つてる筈だ。私とお前との間の事は萬事終つてるのぢやないか……今日では以前よりは猶更さうなのだ。お前は何處でも勝手な所で暮すが好い。それとも仕送りでも不足だと云ふんなら又——』

『あゝ、最うそんな怖ろしい事を被仰らないでください』とワルワラ・バーヴロヅナは遮つて『どうぞ、せめて……せめて此の天使の爲めに』かう云つて彼女は思はず次の間へ驅けて行つて、ひどく派手に着飾らせた少女を抱いて直に戻つて来た。濃い、亞麻のやうな卷毛が、娘の薔薇色をした、小さい、美しい顔の、大きな黒い眼の所まで被さつて居る。少女は嫣然笑つて、眩しいと見えて眼をしぼくさせ、丸まちい、小ちやい手を母の頸にかけて居た。

『アダや、ポア セ トン ベ(お父さんを)』かう云つてワルワラ・バーヴロヅナは眼にかゝつた卷毛を撫で上げてやりながら、力を籠めて接吻して、『プリー ル アバツク モア(妾の事をお願)』

『セ サ ババ(お父さ)』と少女は連れ舌で云つた。

『ウイ モン アンファン、ネス バ ク チュ レーム(んが好きぢやなくつて)』
だがラヴレッキーは最う其の場に居堪らなかつた。

『かう云ふ芝居にはかう云ふ場が實際無くちやならんのかな』かう呟やいて、彼は部屋を出てしまつた。

ワルワラ・バーヴロヅナは稍暫く同じ場所に立ち盡して、微に肩を震はせて居たが、やがて娘を隣室へ連れて行き、着物を脱がせて臥床へ臥かした。と、何かの本を取り上げて、ランプの傍に坐り、一時間も凝として居たが、そのうち自分も床に就いた。

『エ ビアン マダム(奥様、よろしう)』と胸當の紐を解いた時に、召使の女が訊ねた。下女はバリーから連れて来たフランス生れの女だ。

『エ ビヤン ジャスチン(う大丈夫)』と夫人は答へて、『彼の男も随分年を取つ

たけれど、彌張相變らず善い人らしい。あの妾に夜の手袋を頂戴な、それから明日着るのだから鼠色の襟の高い方の着物を出してお置き。アダに食べさす羊肉のカツレツはお忘れでないよ。……きつと此處では手に入れるのは難しいだらうけれど、出来るだけ探して見なけりやいけなわねえ』

「アラ ゲール コム アラ ゲール (まあ一生懸命に) かうジャスチンは答へて蠟燭の火を消した。

三十七

二時間の餘もラヴレツキーは街をうろつき廻つた。パリーの郊外で過した彼の夜の事が、彼の心に思ひ出された。と、胸は裂けさうになり、頭はぼうとして眩暈がして來た。そしてあの時と同じ真闇な、憤らしい思ひが、絶間もなく湧き起つた。『彼女はまだ生きて居たんだ。而も現在此處へ來てるんだ』今更の驚きに彼

はかう呟いた。何だか最うリーザは自分のものでなくなつたやうな氣がする。と思ふと急に息のつまるやうな憤怒が込み上げて來る。何にしても此度の打撃の來やうが餘りに突然だつた。あんなつまらない新聞の寢言を、高が一片の新聞を何故俺はあんなに容易く信じたんだらう。』と云つた所で、若し俺があの新聞を信じなかつたとしたら』と彼は思ひ直した。『さうだ若しあれを信じなかつたとしたらどんな事になつたらう。リーザが俺を愛してゐるつて事も知らずに終りはしなかつたか。又リーザ自身もそれを知らずに濟んだんだらう』さう思ふ後から、かの妻の姿、聲、さては眼が、逃れやうとしても逃さずに附いて來る。……彼は自分で自分を呪つた。世界中のあらゆるものを呪つた。

疲れ果て、彼は夜明方レムの宿へ行つた。やゝ暫く應ずる者がなかつたが、漸くの事で老人が窓から現れた。寢帽を被り、氣むづかしさうに顔をしかめて居て、僅二十四時間前に天晴藝術家と云ふやうな傲然たる威嚴を以てラヴレツキー

に對して居た時の興奮した嚴しい顔付とは全く變つて居る。

『何か御用ですか』とレムは訊ねて『毎晩は弾けませんよ。それに今は風邪を引いたんで煎薬を飲んだ所でしてな』

かうは云つたものゝ、ラヴレッキの顔色のたゞならぬのに驚いた老人は、眼の上へ手を翳して時ならぬ客人の様子をしげく見た上で、『でもまあ御入んなさい』と云つた。

ラヴレッキは部屋へ入つて、椅子に身を埋めた。老人は疑と其の前に立つて、ぼろ／＼になつた縞の寛衣の裾を身體に巻きつけたり、唇をすばめたり噛んだりして居た。

『奥様がやつてゐらしたと云ふ譯さ』とラヴレッキは漸く口を切つて、首を上げたかと思ふと、突然抑へ切れないやうに笑ひくづれた。

レムの顔には當惑の色が現れたが、でもにこりともしせず、無暗と寛衣を體

にしつかりと巻きつけた。

『無論貴方はお知んなさるのだが』とラヴレッキは言葉を次いで、『僕の想像では……いや彼女が死んだと云ふ記事が新聞に出て居たんですよ』

『え……え、そりや近頃の事ですか』と老人が訊ねた。

『さう、つひ此間の事です』

『え……え』と老人は又しても同じ事を云つて、眉を上げながら、『それで居て御當人が此方へいらしたと云ふんですね』

『さうです。今家へ來てるんです。だが僕は……僕は實に不幸な人間ですなえ』かう云つてラヴレッキは又笑つた。

『貴方は眞實不幸な御方だ』と老人はぐ／＼とした調子で同じ事を云つた。

『クリストファ・フェードリツチ』とラヴレッキは言葉を更めて、『一つ僕の手紙を言傳つて貰へますまいか』

『はゝあ、何方にですか』

『リサウエータ』

『あゝ、然うですか、然うですか。いや解りました。よろしいです。で、何時御手紙を御渡したら好いのです』

『明朝、出来るだけ早く』

『はゝあ。では料理番をカーリーチン家へ遣しませう。いや、私自分で行きませうわい』

『それで、先方の返事も持つて来て頂けませうか』

レムは溜息を洩らして

『好いのです。だが御氣の毒になア。眞實貴方はお若いに不仕合な方だとも云ふんでせうて』

ラヴレッキは二言三言リーザへの手紙を認めた。妻の突然來た事を告げ、そ

れに就けても御目に懸りたいから時を指定してくださるやうにと頼んだ——書終

へて彼は狭い寢椅子の上に身を投げて、顔を壁の方へ向けた。老人は床へ入つて、やゝ暫く何かぶつ／＼咳やき續けて居たが、その間にも咳をしたり、煎薬をごく／＼と音をさせて飲んだりした。

朝になつて、二人は起きた。妙な眼付で二人は顔を見合つた。その瞬間ラヴレッキはたまらなく自殺がしたかつた。料理番のカトリンは二人に下等な珈琲を持つて來た。やがて八時が鳴つた。レムは帽子を被つて、カーリーチン家の稽古は十時なのだが、今日はこれから行つても都合の好い口實があるのだからと云ひながら出て行つた。ラヴレッキは再び例の狭い寢椅子の上に身を投げた。例の苦しい笑が又しても心の底で湧き起つた。彼は自分が斯うやつて家から妻の爲に追ひ出された事の始終を思ひ、更にリーザの地位を思つて、眼を閉ぢ、手を頭の背後でしかと組んだ。するうちレムは歸つて來て、一片の紙を彼に渡した。それに

はリーザがペンで次のやうな文句を書いて寄越したのだ。

「今日は御目に懸り兼ね申候。多分明晩はよろしかるべくや。かしこ」

ラヴレッキーは手短かに、しかも一向氣のないやうな調子でレムに禮を云つて、やがて家へ歸つた。

戻つて見ると、妻は朝飯を喫べて居た。アダは髪を綺麗に縮らし、水色リボンに附けた小さい白い上衣を着て、羊肉のカツレツを喰べて居た。ラヴレッキーが入つて来ると直にワルワラ・バーヴロヅナは座を立つて、いかにも殊勝らしい顔をして出迎へた。ラヴレッキーは彼女と一緒に書齋へ隨いて来るやうにと云つて書齋へ入ると直に戸を固く閉ぢ、書齋の中を行きつ戻りつした。ワルワラは座に着き、おとなしやかに手を重ねて、夫の舉動に眼を留めた。瞼の下が薄く染まつて居るが、併し眼は相變らず美しい。

やゝ暫くラヴレッキーは口を利かなかつた。何だか最う身も世もあられぬやう

な氣がした。ワルワラ・バーヴロヅナは少しも彼を怖れて居ない事は明かに解つたが、それにしてもやがては失神も仕兼ねまじき様子であつた。

「ねえ、マダム」とラヴレッキーは漸く口を切つた。息をはづませ、齒を喰ひしばつて居る。「御互に最う云ひ分がましい事をしたつて何の役にも立たないんだ。僕にはお前の後悔は信じられん。よしそれが眞面目にしたところで、二度とお前と一緒に居る事は、つまりお前と一緒に暮らす事は僕には到底も出来さうにない事だ」

ワルワラ・バーヴロヅナは唇を噛み、眼を半ば閉ぢて、「あゝ最う嫌はれてしまつた。最う最後だ。彼の人の眼には妾は最う女でもないんだ」こんな事を思つた。「全く出来ない事だ」とラヴレッキーは上衣の釦を留めながら重ねて云つて、「一體何の爲めにお前がやつて来たのか僕には解らない。多分金の事でよも来たんでせう」

『あゝ何故そんなひどい事を被仰るんでせう』とワルワラ・バーヴロヅナは小聲で云つた。

『それはまアそれとして——兎に角お前は僕の妻だ。不幸にも僕の妻なんだ。だから僕だつて追ひ出す譯には行かん。で先づかう云ふ事にしよう。もし貴女さへ厭でないならば今日の中にラヴレッキーの方へ行つて、彼方で暮して貰ひたい。お前も知つてる通り、彼方には立派な家もあるのだし、それに定つた扶持の外に必要なものは何でも不足なくやつて構はない……ね、それで好いでせう』

ワルワラ・バーヴロヅナは刺繍をしたハンカチーフを顔に押し當て、

『それは最うかねぐく申しました通り』と唇を神経的にびく／＼させながら『どんな事でも貴方がよろしいと被仰る事を妾は致すので御座いますし、わけて只今の場合はたゞ最う妾の方から御願致します事は——せめて貴方の寛大な御所置に對して御禮だけでも十分に申させて戴ければと思ふので御座います』

『どうぞ最う禮なんかするのは止めて貰ひたい——そんな事をされない方が却つてました』とラヴレッキーは慌て／＼云つて、『ではまあ』と云ひ足し、戸口に近寄りながら『此の上の事は——』

『明日妾ラヴレッキーの方へ參る事に致します』とワルワラ・バーヴロヅナは明瞭と云つて、恭々しげに座を立ち、『ですけれどフェードル・イワーニチ……』
(彼女は最早テオドールと云ふやうな親しい呼び方はしないのだ)

『何か用ですか』

『妾は最う無論の事御赦を願へる身ではないんで御座いますけれど、でもせめていつかは——』

『え、それは、ねえ』とラヴレッキーは相手の言葉を遮り、『お前も伶俐な女だし、僕だつて馬鹿ぢやない。お前に赦して貰ひたいなんて心の少しもない位の事は僕には解つてる。それにその事なら僕の方では風の昔に赦して居るんだだけ

ど、たゞ二人の間には大きな隔があつたんだ』

「妾最うどんな事にでも忍びます」とワルワラ・バークロヅナは頭を下げながら答へて、『妾は自分の罪は致しません。よし妾の亡くなつたと云ふ知らせを御聞きになつて、貴方がお喜びなさいましたと云ふやうな事を聞きましても、驚きなどいたさなかつたに違ひありません』と卓の上にラヴレツキーが置かれたまゝになつて居た新聞の方を一寸手で指しながら、おだやかに彼女は云ひ足した。フエードル・イワーニチはびくりとした。新聞には鉛筆で印がつけてあるのだ。ワルワラ・バークロヅナはいよく怖れ入つたやうな様子をして彼を眺めた。鼠色のパリー仕立の寛衣でしとやかに包んだ彼女のしなやかな、殆んど娘らしい容姿、白襟に取り巻かれた彼女の細い弱々しい頸、息をするにも靜に波立つ胸、腕環や指環を嵌めた事のない腕と手——光澤のある髪の毛から小さな靴に包まれた見えるか見えない位の足先に至るまで、彼女の身についた凡てがいかにも美術的に出来て居る。

に出来て居る。

ラヴレツキーは悪しみの眼を以て彼女を眺めた。何だか最う堪らなく「ブラグオ！」とでも叫びたいやうな、拳を固めて女の綺麗な頭を擲り飛ばしてやりたいやうな氣がした——でもそのまゝ踵を返して其場を去つた。それから一時間後には彼はワシリエヴスコへ向けて出發し、二時間後にはワルワラ・バークロヅナが町でも最上等の馬車を命じ、黒いヴェールのついた麥藁帽子を被り、じみなマントを着、アダをジャスチンに預けて置いて、カリーチン家へと出掛けた。召使共を問ひたゞして知り得た所によつて、夫が毎日カリーチン家を訪ねたと云ふ事が解つた。

三十八

ラヴレツキーの妻が〇一市にやつて来た日、ラヴレツキーにとつて悲しい日、

その日は彌張リーザにとつても不幸な日であつた。彼女が自分の部屋を出て階下へ下り、母に「お早う」を云はうとする隙もなく、窓の下に馬蹄の音が聞えて、庭へ乗り込んで来るパンシンの姿が彼女に人知れぬ驚きを與へたのだ。「最後の返答を聞くのにこんなに早く被來したのだ」と彼女は思つたが、實際その通りであつた。客間で一幕演じた後で、パンシンはリーザに庭へ一緒に来るやうにはのめかし、庭へ出てからいよいよ自分の運命の處決を求めた。リーザはあらん限りの勇氣を奮ひ起して、何うしても彼の妻にはなれぬ旨を告げた。彼はリーザの横に立つて、帽子を目深に引き下げながら、その始終を聞いて居たが、最後に丁寧な併し變つた聲で、「それが貴女の最後の御言葉ですか」と云ふ事、それから「貴女の御意をそんなにまで變へさせるに至つた理由が何か自分にあるのか」と云ふ事を訊ねた。と、彼は手を眼に押し當て、弱く且あわたしく吐息を洩らして、さて眼に當てた手を離した。

「私は陳腐な遣り方を欲しなかつたのです」と彼は嘆れ聲で云つて、「私は自分の情の命ずる所に従つて妻を選びたかつたのです。併しそんな事はあるべからざる事でした。最う好加減空想にもお別れとしませう」彼はリーザに向つて頭を低く下げてから、家へ入つた。

リーザはそのまゝ直に行つてくれれば好いと思つたが、彼はマリヤ・デミトリエヅナの部屋へ行つて、小一時間も居た。そして出て來た時にリーザに向つて、「ボートル メール ヴーアペール アデユー アジャメモー（お母さまが呼んで居らうか）かう云つてやがて、馬に跨がつたと思ふと、出口から最う出来るだけ疾く馬を駆けさせて出て行つた。リーザはマリヤ・デミトリエヅナの部屋へ行つて見ると、母は泣いて居た。パンシンが自分の失敗を最う告げてしまつたのだ。

「お前は妾を死なせたいの。ね、お前は妾を死なせたいの？」悲しんで居る寡婦はこんな風な事まで云つて嘆き出した。「誰か外に好い人でもあるの。彼方に不足

があるわけがないぢやないか。侍従官でさ。清廉な方でさ。ね、ペテルスブルグでは好な官女方と縁組の出来る程の方なんですよ。それに妾が——妾があれ程に望んで居た縁なんですよ、お前はまア久しい前から彼の方に對してそんなに心變して居たのかえ。そんなたわけた事をするのはあの從兄の仕業ぢやないの、まア何て立派な相談相手をお前は見付たんだらうね」

「それにまア彼の方と云つたら」とマリヤ・デミトリエヅナは更に言葉を續けて、「あの悲しい中でも何てまア禮儀の正しい事でせう、何てまア行き届く事でせう。彼の方はね、妾を見限るやうな事はないからと固く被仰つたんだよ。あゝ最う妾は何うして好いか分らない。あゝ頭が割れさうに痛むの。あゝどうなるんでせう。お前の量見がなほらなければ、妾はお前の爲めに死んでしまふに違ない——ね、解りましたか」こんな風に云つて、更にリーザを二度までも不孝呼ばりしてから、マリヤ・デミトリエヅナは其の場を去らした。

リーザは自分の部屋へ歸つた。併しバンシン并に母との會見から得た苦しみを和げる暇もなく、更に他の嵐が頭を掻き亂した。全く思ひもかけない事が湧き起つて來たのだ。何でもマルファ・チモフエーヅナが部屋へ這入つて來ていきなり背後の戸をぱたりと閉めた。見ると老婦人の顔は眞蒼になつて居る。帽子は歪んで居る、眼は輝いて居る、それに手と唇がぶるぶる震へて居るのだ。リーザは驚いた。性根のしつかりした、理に明かな叔母が、こんなになつた事は今迄に一度もなかつたのだ。

「嬢や、大變な事だ」とマルファ・チモフエーヅナは震へて杜切々々の小聲で云つた。「大變な事だ。お前さんはまア誰にそんな事を教はつたのだえ。それを聞かしておくれ。……まア何しろ水を飲まして貰はう、妾口が利けないのだ」

「叔母さん、落着いてください。まア何でせう」とリーザは水を遣りながら云つて、「それにまア叔母さんはバンシンさんを餘り好く思つて居らつしやらないやう

に妾思つて居ましたのに』

マルファ・チモフエーヅナは水呑を押し戻して、『妾には呑めない。無理に飲まうなら齒が皆抜けてしまふかも知れん。バンシンさんは何にもそれには關係がないぢやないか。何故バンシンさんを引き出します？ それよりは夜中示し合せをするやうな事をお前さんに誰が教へたのか妾に聞かせておくれ——え、嬢や』

リーザは蒼くなつた。

『さア、どうぞ、その事は打ち消さんやうにしておくれ』とマルファ・チモフエーヅナは云詰めて、『シユーロチカが何もかも見て妾に告げただよ。彼女がお喋舌をするのは止めなけりやならないが、でも彼女は嘘吐ではないからね』

『叔母さんその事は妾嘘だとは申しません』とリーザは聞えるか聞えないやうな聲で云つた。

『あゝ、あゝ、眞實かえ、眞實かえ、嬢や、お前さんは彼と示し合せをしたんだ

ね。彼はお前今こそおとなしきやうにしてるが、舊痕のある人間だよ。』

『そんな事はいたしません』

『ではどうしたの』

『妾本を取りに階下へ行きましたらば、彼の方がお庭に居らしたんです。そして妾をお呼びなすつたんです』

『それでお前さんは行つたんだね。大變な事だ。でまアお前さんは彼を思つてると云ふわけだね、えゝ？』

『妾彼の方は愛して居ます』とリーザは穏やかに答へた。

『まア何と云ふ事だらう。此の娘が彼を愛してゐるつて！』かう叫んでマルファ・チモフエーヅナは頭巾を握み取つて、『此の娘がまア妻のある男を愛してゐるつて！あゝ、此の娘が彼を思つてゐるつて！』

『彼の方が妾に被仰つたのには……』とリーザは口を切つた。

『どんな事を云つたと云ふの、あの馬鹿者が、えい？』
『奥様がお亡くなりなすつたと被仰いました』

マルファ・チモフエーザは十字を切り、『どうぞ神様此の娘をお護りください』と口の中で云つて、『此の娘は最う仕様の無いおてんばですがそれはお咎めくださいますな。それに彼は多分妻に死なれたのに違なからうと思ひますし、加之につまりない隙潰しは致さない男で御座います。彼は一人の妻を葬りまして、今又新しいのを求めて居ります……彼は好い人間には違ないがね、たゞ一つお前さんに云つて聞かせて置く事がある。何でも妾の若い頃の事だがね、さう云ふ事から災難に遇つた娘さん達が随分あつた。妾の云ふ事に腹を立ててはいけないよ。眞直な事を聞いて腹を立てるものは阿呆だけだからね。それでお聞き、妾は今日彼には許す事が出来ないと云つてやつたのだ。妾は彼を可愛いだけけれど、この事は容赦しないつもりです。彼は結局妻に別れた男なんだ。水を飲ましておくれ。』

それはそれとしてお前さんがバンシンさんの縁談をはねつけたのは、眞實えらいと思ひます。たゞね、夜夜中他のさう云ふ獸共の相手になつて居るやうな事はしなさんなよ。どうぞね、この年寄にまで心配させないでおくれ、でないと妾だつて何時までも可愛い〜では居られないのだからね。妾だつても噛みつく位は出来るんだよ……あの男孀めが！』

マルファ・チモフエーザが出て行くと、リーザは隅に坐つて、泣き出した。彼女の心には苦しい痛があつた。彼女はまたこんなにも屈辱する程の事はないのだ。戀はまだ彼女に何の幸福をも現しはしないのに、昨夜から二度までも泣かされるのだ。此思ひもかけなかつた感情は彼女の胸に今燃え初めたばかりなのに、何たる重い値をその爲めに拂はせられた事だらう、どうして斯うあらくしく他人の手に此の聖い秘密が汚されるのだらう。彼女は恥かしさと、苦しさと、惱ましさとを覺えた。併しその間何の疑惑も何の恐怖もない——ラヴレッキーは前よ

りは一しほ懐しいものとなつた。自分によく解らなかつた間はためらひもしたが、あの會合以來、あの接吻以來——彼女は最早ためらつては居れなくなつた。彼女が自分は彼人を愛して居るのだと自ら知つた今に於ては、たゞ正直に眞面目に愛するより外の心はない。あらゆる生命を擧げて、それにしつかりと結びついて、聊かたりとも人の非難を怖れるやうな事はない。彼女は如何なる暴力と雖、此の絆を断ち得ないやうな氣がした。

三十九

マリヤ・デミトリエヴナはワルワラ・パーヴロヴナ・ラヴレツキが訪ねて來たと告げられたので、非常に當惑した。遇つて好いか悪いかすら分らなかつた。フエードル・イワーニチの不興を買ふのも何だか氣がよりなのだ。が、結局好奇心の方が勝利を得た。「なかに、あの女だつて彌張親類の譯なんだもの」と思ひ直し

て、肱掛椅子に座を占め、馬丁に「御案内申しなさい」と命じた。數分経つて、扉が開いて、ワルワラ・パーヴロヴナが身輕に殆んど音のしない足の運びをして、マリヤ・デミトリエヴナの傍へ近寄り、相手を椅子から立たす隙もなく、その前へ行つて膝に届くほど頭を下げた。

「何て辱ない事でせう、叔母さん」と情の充ちたやさしい聲で彼女は口を切り、「ほんとに妾辱なく思ひますの。貴女の方からこんなにして戴かうとは思ひませんでした。妾何だか神様に御目にかゝつたやうな氣がいたしますわ」

こんな事を云ひながら、ワルワラ・パーヴロヴナは自分ながら全く思ひもかけずマリヤ・デミトリエヴナの片手を執つて、それを自分の蒼白いラワンデルの香のする手袋の中に軽く握り、いかにも媚びるやうな風に薔薇色の唇へそれを持つて行つた。マリヤ・デミトリエヴナはたゞ最う茫然たるばかりであつた。このやうに美しい、このやうに立派に着飾つた婦人が、殆ど自分の足下に近くへり下つ

て来て居るとは何たる事だらう。一體自分は何處に居るのやら、それすら解らなかつた。で、半ばは手を引つ込めたいやうな、半ばは相手を椅子に着かせて、何か斯う親しい言葉をかけてやりたいやうな氣がした。が結局ワルワラ・バーヴロヅナの身體を起させて、その滑かな香の佳い額に接吻した。ワルワラ・バーヴロヅナの方では此の接吻に全く壓倒されてしまつた。

『御機嫌よろしう』とマリヤ・デミトリエヅナは云つて、『妾眞實思ひもかけませんでした……でも彌張お目にかゝつたのは嬉しう思ひますわ。ねえ、貴女、夫婦の間の事は妾なんかには審判は出來ないんですもの』

『それは最う一から十まで夫の方が正しいんでございますの』とワルワラ・バーヴロヅナは相手の言葉を遮つて、『皆妾が悪いのでございます』

『何てまあ殊勝な御心掛でせう』とマリヤ・デミトリエヅナは應じて、『本當に何てまあ。で最う此方へ居らしてから餘程になりますの。彼人に御遇ひなすつ

て？ まあ何よりお掛けなさいまし、どうぞ』

『昨日参つたのでございませうとおづくして居るやうな様子で椅子に腰掛け、

『フェードル・イワーニチには遇ひました。それに一切話もつけましたの』

『まあ。それは結構でしたのねえ。で彼人はどうしましたの』

『あんまり突然参りましたものですから、もしや却て御腹立が暮るのではないかと大變心配いたして居りましたのですが』とワルワラ・バーヴロヅナは言葉を次いで、『でも遇ふ事は遇つてくださいました。』

『と云ふのは、彼人が……さう、さう、分りました』とマリヤ・デミトリエヅナも言葉を次ぎ、『表面は少し暴々しいだけで、心底はやさしかつたと云ふんでせう』

『フェードル・イワーニチは、妾を赦してはくださいませんでしたの、妾の申す事は聞いてくださいませんでしたの。でもラヴリーキーを妾の住居にしると被仰

つてくださいました程ですから御心は最う十分解つて居ります」

『まア、あの結構な所を！』

『で御心に従つて妾明日彼地へ参らうと思つて居るのでございますが、まづ何よりも此方様へ先に御伺いたすのが當然だと思ひまして』

『それは最うくれぐれ有難く思つて居ります。親類同士は御互におろそかにしないやうに致さねばなりませんわ。それはさうと、貴女が大變ロシア語を立派に御使なさいますのに妾びつくりして居るんですよ。セー エトンナン（不思議で）ワルワラ・バーヴロヅナは吐息を洩らして、

『妾あんまり永く外國に居ましたのですものねえ。でも、心はいつもロシアの間で居ました。自分の國を忘れるやうな事はありませんでした』

『ええ、ええ、それでこそ宜しいんです。ですけど、フェードル・イワーニチさんはさぞ思がけなかつたでせうねえ。さう、眞實ですよ。ラ バトリー アバ

ン ツー（何と云つても自分）の國が一番ですわ）まア、どうぞ、一寸見せてくださいな——何て結構なマントでせう』

『御氣に召しました？』と、ワルワラ・バーヴロナは手早く肩からマントを脱ぎ取り、『ポードラン夫人から戴きましたので、大した物ぢやございませんの。』

『そりやもう一目見れば解りますわ。ポードラン夫人からなんですつて！ まア何て佳いでせう、好みが違ひますのねえ。さぞいろ／＼な結構な物を持つて入らした事でせう。せめて見せていたゞく事だけでも出来ればねえ』

『何でも御役にさへ立ちますなら。それに失禮でございますが、あの御女中さんにもいろ／＼なもの、雛形を御目にかけてもよろしうございますわ。パリーから女を一人連れて参つて居ますの——そりや不思議な程氣の利く裁縫師なんですよ』

『ありがたう。でも眞實何だか極りが悪いやうで……』

「極りが悪うございますつて？」とワルワラ・バークロヅナは責めるやうに問ひ返して、『妾御家の者同様に隔なくしていたゞいた方が却て嬉しうございますわ』マリヤ・デミトリエヅナは悉皆まゐつてしまつた。

『ダーゼット シヤルマント (彼女ほんとお美しい)』と彼女は云つて、『ですけれど何故帽子や手袋を御取りなさいませんの』

『え？よろしうございますの？』とワルワラ・バークロヅナは問ひ返して、感に堪へぬやうに軽く手を握つた。

『無論ですともさ。何なら一緒に御食事をしていたゞきたいんですの。あの娘も御目にかゝらせますわ』と云つて、マリヤ・デミトリエヅナは少しどきまぎしだが、心の中では「なアに、構ふものか」と思ひ定めて、『彼女は尤も今日は氣分が良くないと申して居るんですけれど』

『まア、何てうれしんでせう』とワルワラ・バークロヅナは叫んで、ハンカチ

ーフを眼に當てるやうにした。

と、そこへ召使がゲデオノーグスキーの來た事を告げた。喋舌老爺は頭を下げてにこ〜しながら入つて來た。マリヤ・デミトリエヅナは彼を客に紹介はせたく爺さん初はひどくどきまぎして居たが、自分に對するワルワラ・バークロヅナの愛嬌たつぷりな丁寧な振舞に接すると、そろ〜耳が鳴り出して、無駄言と云はず人の悪口と云はず、お世辭と云はず、まるで蜜のやうに唇から滴り出た。ワルワラ・バークロヅナは微笑を抑へてその話を聞いて居たが、おひ〜自分でも話をするやうになつた。彼女はつゝましやかにバリーの事、旅行の事それからバアデンの事などを話した。その間に二度までマリヤ・デミトリエヅナを笑はせたがその度に後から溜息を洩らし、何となく自分の所ならぬ輕浮さ加減を内心責めて居るらしい様子であつた。彼女は更にアダを連れて來させてくれるやうに頼み、白くしなやかな、佳い石鹼の香のする手から手袋を外し、裾飾や褶紐やレースや

薔薇花形總の付け法や付け所を示した。それから又彼女は新しいイギリス製の「ヴィクトリヤ、エッセンス」と云ふ香水を持って来る約束をした。マリヤ・デミトリエヴナはその香水を贈物として貰ふ事を承諾した時、子供のやうな喜び方をした。ワルワラ・バーヴロヴナは何だか始めて自分がロシアの鐘の音を聞いた時の感じに憶ひ出されて涙さへ流れ落ちるやうな気がした。「そりや最う深く胸に沁み通りましたのですよ」と彼女は云つた。

と、その瞬間リーザが入つて来た。

あの朝以來、ラヴレッスキーの手紙を読んで震へ上つたあの時以來、リーザはその奥様と云ふ人と遇ふ用意をして居た。何だかその人と遇ふやうな気がしてならなかつたのだ。彼女は自分の所謂罪深い望に對する罰として、その人に遇ふ事を避けるやうな事はすまいと覺悟したのだ。思ひがけない運命の危機は彼女を心の底から攪亂した。僅二時間も経つか経たないうちに、「彼女の顔はまう瘦せたやう

に見えた。でも彼女は一滴たりとも涙をこぼさない。「これが當然の事なのだ」とわれと我身に云つて、ともすれば頭をもたげやうとする烈しい悪しみの情を自ら驚き慌てゝ辛くも凝と抑へるのであつた。「なに、どうしても妾は下へ行かなければならないのだ」ラヴレッスキー夫人が來たと聞いたその刹那、リーザはさう思つてやがて階下へと下りた……やゝ暫く客間の戸口に立つて居て、やうやくそこを開ける勇氣を奮い起した。「妾は彼女に對して悪い事をしたのだもの」かう思ひながら鬨を跨いだ。そして努めて相手の顔を見、努めて笑顔を作つた。ワルワラ・バーヴロヴナはそれを見ると直に自分の方から出迎へて、軽く而もへり下つた挨拶をした。

「失禮ですけれど妾自分から御挨拶致します」と彼女はやさしい聲で口を切つて、「お母様があんまりやさしくしてくださるものですから、つひそれに甘へて貴女までが最う善くしてくださるものと極め込んで居ますの」

そんな風な言葉を云つた時のワルワラ・バーヴロヅナの冷やかな而も優しさうな表情、表面だけの笑顔、手や肩の動かし方、それから衣装、何から何までリーザには嫌悪の情を起させた。リーザはその爲めに返答の言葉も出さず、たゞ努めて手だけ差し出し得たゞけであつた。「この娘さんは妾を嫌つて居るな」と思ひながら、ワルワラ・バーヴロヅナはリーザの冷たい手先を暖かく握つた。そしてマリヤ・デミトリエヅナの方へ向いて、「ノー セール エ デリシエーズ」(でもまあお麗です)と小聲で云つた。リーザはぼつと顔を赤くした。さう云はれたのが、彼女には嘲弄としか聞えなかつたのだ。併し彼女は自分の其の印象を信じまいと心を定めて、窓際の刺繡臺に向つて腰かけた。其所へ行つてもまだワルワラ・バーヴロヅナはリーザの氣を休めてはくれなかつた。彼女は其の趣味を賞め、その巧妙さを賞めそやした……リーザの胸は烈しく、苦しく波打つた。どうして好いか解らなくなり、その場所に坐つて居るのも堪へられぬやうな氣がした。ワルワラ・バー

ヴロヅナは何もかも知つて居ながら、人知れの勝利の念に彼女を愚弄して居るやうに、リーザには思はれた。と、折よくゲデオノーフスキがワルワラ・バーヴロヅナに話しかけて、その注意を奪つてくれたのでリーザは先づ助かつた思をした。で、刺繡臺の上に屈んで、ひそかにワルワラの方を見守つた。「この女は彼人に愛されて居たのだな」とは思つたが、直にラヴレツキーの事は頭から取り去つてしまつた。自分で自分が制せられなくなるのが怖ろしい。何だか頭が狂ひさうにも思はれた。マリヤ・デミトリエヅナは音樂の話之初めた。

『あの、何ですつてねえ、貴女は』と彼女は口を切つて、『大變音樂の方は御上手でゐらつしやるさうですなえ』

『そりや最うすつと以前の事ですわ』とワルワラ・バーヴロヅナは答へたかと思ふと、直にピアノに向つて、鍵盤の上に指を疾く走らせながら、『弾いて見ませうか』

『御願出來ますなら、どうぞ』

ワルワラ・バーヴロヅナはヘルツ作の花やかな、むつかしい『エチュード』の一曲を極めて正確にやつてのけた。力も大したものだし、弾き振もなかく巧なものだ。

『シルフィード!』とゲデオーズスキーが叫んだ。

『たまりませんわねえ』とマリヤ・デミトリエヅナも調子を合せて、『まあ、ワルワラ・バーヴロヅナさん、眞實』と云ひ足した。こんな風の名を呼んだのが初めてなのだ。『眞實びつくり致しましたの。立派に音楽會に御出なさいませうだけの御腕ですわ。此家にも一人ドイツ人で年寄の音楽家が居るんでございませうよ。一寸變人ですけれど、腕はなかくしつかりして居ります。リーザを教へて貰つて居るのですけれど、とても貴女には敵ひませんわ』

『リサウエータ・ミハロヅナ様も音楽はなかく御達者なんでございませう』と

ワルワラ・バーヴロヅナは云つて、心持リーザの方へ顔を向けた。

『え、可成には致しますし、それに大變好きなんでございませうが、貴女の御傍へ行きましてはまるでもう物の數にもなりません。それはさうと、音楽の事ならば今一人お若い男の方がございませう——何時かきつと御紹介いたしませう。その方は根はもう全くの藝術家でして、作曲もなかく御上手です。あの方こそ貴女の御價値を十分に御解りになりせうよ』

『お若い方ですつて?』とワルワラ・バーヴロヅナは云つて、『何人ですの。御氣の毒な境遇の方でもございませうの?』

『いゝえ、どういたしまして、貴女。妾共の間での華美者なんですの。それどころですか、ペテルスブルグでもあれ位の華美者は少いでございませう。侍從官ですから、貴顯の方々とも御交際なさいませう御身分ですの。きつと御聴きなさいませうよ。あのバンシンさん、ウラデーミル・ニコライチと被仰る方なん

です。此頃政府の御用で此方へおらしてなんでございます。たしかに最う未來の大臣ですわ』

『それでおらして藝術家でゐらつしやいますの？』

『つまり胸の方が藝術家で居らつしやるのでして、それだけ人格も上品な方なんです。多分御遇ひなさいますやうな事になるでせう。宅へは好く居らつしやるのですし、今晚も御招きしてあるのですから、多分いらつしやいますでせうよ』と云ひ足してマリヤ・デミトリエヴナは軽く吐息して、苦しさを包んだ無理な笑顔をした。

リーザにはその笑顔の意味がよく解つたが、今となつては最うそれは彼女には何でもないのだ。

『それにまだ御若いと彼仰いますの』とワルワラ・パーヴロヅナは前と同じ事を云つて、軽くピアノの調子を彼方此方と富つて見て居る。

『二十八と被仰るんですけれど、餘程ふけてお見えなさいますの。眞實アン・ユヌ オム アコンブリー(才學あ)です』

『天晴れ立派な青年と云ふのでせうよ』とゲデオノーヴスキーが口を出した。

ワルワラ・パーヴロヅナは突然ストラウスの騒々しいワルツを弾き初めた。初めがひどく高くて早い顫音だつたので、ゲデオノーヴスキーはすつかり驚かされた。ワルツの眞最中で、ワルワラは急に悲しい主題に移り、「リユシヤ」から出たフラボコの歌調で結末をつけた。つまり彼女は快活な曲は自分にはまだいつくり合つて居ないと覺つたからだ。だが、センチメンタルな個所に力を入れてやる「リユシヤ」から出た歌調は、ひどくマリヤ・デミトリエヴナを感動させた。

『何て佳いでせう』と彼女はゲデオノーヴスキーに小聲で云つた。

『シルフィード(天女)』とゲデオノーヴスキーは眼を上の方へ向けながら前と同じ事を云つた。

食事の時間が来た。マルファ・チモフェーヴナはスープが出てしまつた頃、やつと二階から下りて来た。彼女はワルワラ・バーヴロヴナに對しては至極冷淡に振舞ひ、禮儀を盡した言葉に對しても片言の受答をし、相手の顔はてんで見もしなかつた。ワルワラ・バーヴロヴナは直に老夫人から話などの出やうのない事を見て取つてその人と口を利く事は止にした。その代り、マリヤ・デミトリエヴナは層一層丁寧にした。叔母の無作法を怒つたからだ。それにも拘らずマルファ・チモフェーヴナはたゞにワルワラ・バーヴロヴナの顔を見向かなかつたばかりでなく、リーザの方をも見なかつた。その癖眼は文字通りに燃え輝いて居るのだ。彼女は石像のやうに坐つて、顔を黄蒼くし、口をしつかりと結んで、何一つ食べなかつた。リーザはいかにも落ち着いて居るらしい様子をして居た。事實心の方も一層安らかであつた。何とも知れぬ無知覺の状態、罪を宣言された者のやうな無知覺の状態に襲はれて居たのだ。

食事中にはワルワラ・バーヴロヴナは餘り口を利かなかつた。何だか又臆病になつたらしく、顔にはしほらしい幽鬱の情が充ちて居た。たゞゲデオノーフスキーだけが相變らず自分の身の上話で話の花を咲かせて居た。でも時々マルファ・チモフェーヴナの方を怖る／＼見ては咳をした。一體彼はマルファ・チモフェーヴナの前で嘘を言はうとすると、いつも咳が込み上げて来るのだが、此度は流石の老婦人も何等彼を妨げるやうな事はしなかつたのだ。食事が済むとワルワラ・バーヴロヴナはいかにも骨牌が爲たさうな風を見せた。それを見たマリヤ・デミトリエヴナは、全く抑へ切れぬ程の嬉しさを覺えた。そして「眞實フェードル・イワーニチは馬鹿なんだよ。此のやうな女の價值が解らないなんて」と心の中で思つた。

彼女はワルワラ並にゲデオノーフスキーと骨牌をしやうと坐つた。マルファ・チモフェーヴナは「お前さんは大相顔色が悪い。頭痛がするのだらう」と云つて、

リーザを引張つて二階へ上つて行つた。

「え、彼女はひどく頭痛がすると云ふんですよ」とマリヤ・デミトリエヴナはワルワラ・バーヴロヴナの方を向いたまゝ云つて、眼をくるく／＼させながら、「妾も時々さう云つたやうに頭痛がして困るのですよ」

「左様ですか」とワルワラ・バーヴロヴナはそれに答へた。

リーザは叔母の部屋へ行つて、力なく椅子に身を落した。マルファ・チモフェーヴナはやゝ暫く黙つてその方を見つめて居たが、徐々にその前へ行つて跪づいた。そして彌張黙つたまゝ代る／＼その両手に接吻した。リーザは前へ屈んで、顔を眞紅にして、泣き出した。でもマルファ・チモフェーヴナの身體を起させやうとはせず、その手を取りのけさせやうとしなかつた。その手を取りのける権利が自分にはないのだ、叔母がこのやうにして後悔と同情を表すのを制する権利も自分にはないのだ、又前日の事を叔母が詫びるのを止めさす権利も自分にはない

のだ、リーザはそんな風な氣がした。かくてマルファ・チモフェーヴナはこの二つの哀れた、蒼白い、力ない手をいくら接吻しても心が治まらなかつた。無言の涙が彼女の眼からも、リーザの眼からも流れた。猫のマトロスは、廣い肱掛椅子の上の毛糸細工の間で喉をごろ／＼云はせて居り、聖像の前の小さいランプの長い炎が、微かに揺れつはためきつして居た。次の部屋の戸の陰にはナスターシャ・カールボヴナが立つて居て、丸めた辨慶縞のハンカチーフで彌張人知れず眼を拭いて居た。

四十

それと時を同じくして、階下の客間では骨牌が愉快に運んで居た。マリヤ・デミトリエヴナは勝つたので、上機嫌になつて居る。と、そこへ召使が入つて來てバンシンの來訪を告げた。

マリヤ・デミトリエヴナは骨牌を手から落して、不安らしく脇掛椅子に腰掛けたまゝもぢくした。ワルワラ・バーヴロヴナは片頬笑をしながらその様子を眺めて居たが、やがて眼を戸口の方へ轉じた。と、バンシンが黒のフロックコートを頸の所まで鈕を留め、高いイギリス風のカラーをつけて現れた。「こちらから屈するのは辛い、この通り出掛けて来ました」と云ふ様子が、につこりともしない剃り立の彼の顔に見えて居た。

『貴方はまア』とマリヤ・デミトリエヴナは叫んで、「いつも突然にゐらつしやいますのねえ』

バンシンはその返答に一寸眼をマリヤ・デミトリエヴナの方へ向けただけで、何にも云はなかつた。彼はいかに丁寧に頭を下げたが、いつものやうに手に接吻するやうな事はしなかつた。マリヤ・デミトリエヴナはバンシンをワルワラ・バーヴロヴナに紹介すると、彼は一步引き下つて、彌張丁寧に頭を下げた。その時

の様子は前よりは一層端麗で丁寧であつた。挨拶が済むと彼は骨牌臺の近くに座を占めた。骨牌の勝負は直に濟んだ。バンシンはリサウエータ・ミハロヴナが如何したかと訊ね、身體の工合が良くないと聞いて、氣遣はしさうな色を見せた。と、今度はワルワラ・バーヴロヴナに話しかけ、いかに外交的に一語だに苟もせず十分その値を持たせるやうな話振をし、又相手の答は餘す所なく謹しんで聞きとると云つた風にやつた。しかしその外交的な威嚴のある調子はワルワラ・バーヴロヴナには何の感じも與へないと見えて、彼女はそれに關はずやつてのけたワルワラ・バーヴロヴナの方はどちらかと云ふと、いかに心安げに相手の顔を見て、氣輕に話し、その小さい鼻の孔は、笑ひたいのを抑へて居るやうに震へて居た。やがてマリヤ・デミトリエヴナはワルワラの才能を賞めにかゝると、バンシンはカラーの許す限り首を丁寧に傾げて、「そりや最う十分解つて居ます」と云つて、話をどうかしてもメツテルニヒの外交問題へ向けやうくとした。ワルワ

ラ・バーヴロヅナは眼のうち情を含ませて、「それはさうと貴方は立派な藝術家で居らつしやいますと云ふではございませんか、ねえ貴方」と聲を低めて、「ブネ！(さあ)」と云つてピアノの方へ一寸首を傾げて見せた。此の「ブネ！」と云ふ一語を浴せられただけで、魔術にでもかゝつたやうに、パンシンの様子が見る間にすつかり變つてしまつた。氣づかひな様子がなくなつて、彼は笑顔になり、だん／＼快活になつて、上衣の釦を外し、「私などは似非の方ですが、貴女こそ本物の藝術家であらつしやると云ふ事です」と云ふ同じ事を幾度も云つて、ワルワラ・バーヴロヅナに隨つてピアノの傍へ行つた。

「パンシンさんに「空の月」と云ふ御自作の歌を歌つていたよござませうよ」とマリヤ・デミトリエヅナが叫んだ。

「歌つていたよけますの？」と云つて、ワルワラ・バーヴロヅナは電のやうな視線で彼を見た、「どうぞ御掛けあそばして」

パンシンは類と辯解を始めたが、

「お掛けあそばせな」と、後の椅子を叩きながら、ワルワラはしつこく云つた。

パンシンは座つて、咳をして、カラーを引張つて、さて自作の歌を歌つた。

「シャルマン！(ようございま)」とワルワラ・バーヴロヅナは云つて「いかにも御上手であらつしやいますのねえ。ウザベ デユ スチール(つてからんと御出来んな)どうぞ今一度」

かう云つてワルワラはピアノの周圍をグルリと一周して丁度パンシンの向う側に立つた。メロドラマ式の震へ聲を加へて、彼は再び歌つた。ワルワラ・バーヴロヅナは、ピアノに腕をもたせ眞白な両手を唇と水平に保ちながら、ちつとパンシンを見つめた。パンシンが歌ひ終ると

「シャルマン、シャルマン イデー(まあ何て佳)といかにも鑑賞家らしい落着い

た自信ありげの態度で彼女は云つて『あの、何か外に女聲、あのメッオ、ソブラノに良い御歌を御作りになつたのはございませぬの？』

『なか／＼私に作るなんて事は出来ないですよ』とバンシンは答へて『たゞ時々仕事の隙に戯事をして見る位なものなんです……それはさうと貴女は御歌ひになりませんか』

『えー』

『あら、では何か一つ歌つて聞かせていたゞきたうございませぬ』とマリヤ・デミトリエヴナが傍からせがんだ。

ワルワラ・バーヴロヅナは熱した頬に亂れかゝつた髪を撫で上げて、一寸首を振つた。

『妾達の聲はきつと好く合ひませうよ』とバンシンの方へ向いて云つて『二部合唱を致さうぢやございませぬか。』ソソ、ゲロン』は如何でせう。それとも『ラ

シ ダレム』か、『ミラ ラ ビアンカ リユナ』は？』

『私は以前好く』ミラ ラ ビアンカ リユナ』を歌つたもんですが』とバンシンは答へて『それもすつと以前の事ですから、今では忘れてしまひました』

『何でもありませんわ、低い聲でさらつて見ませうよ。御免あそばせ』と云つてワルワラ・バーヴロヅナはピアノに向つて坐り、バンシンはその側に立つた。

二人は先づ小聲で二部合唱を歌ひ、ワルワラ・バーヴロヅナは幾度も相手の歌ひ方を正してやり、さていよ／＼聲を張上げて歌つた。『ミラ ラ ビアンカ リユナ』の歌が二度繰り返された。ワルワラ・バーヴロヅナの聲は既にそのみづ／＼しさを失つて居るが、併し非常な熟練はそれを補つて餘す所がなかつた。バンシンは初はおど／＼して居て、調子も少し外れて居たが、だん／＼油が乗つて来て、全然正確とまでは行かないにしても、少くとも肩を震はし、全身を揺り動かす、時々黒人染みた遣り方で手を差し上げた。ワルワラ・バーヴロヅナは後で、

タールベルヒの小曲を二つ三つ奏り、愛嬌を籠めてフランスのバラッドを一つ奏つた。マリヤ・デミトリエヅナは云ひ知らぬ嬉しさを感じた。幾度リーザを迎へに遣らうと思つたか知れない。流石のゲデオノーフスキも云ふべき言葉を失つて、たゞ無暗に首をうなづかせるだけであつたが突然欠が込み上げて来て、手で口を抑へる隙もなかつた。此の欠はワルワラ・バーヴロヅナの眼を逃れなかつた。彼女は直にピアノに背を向け、「アッセ ド ミュージック コム (充分ですわ) 御話いたさうぢやございませんか」と云つて、腕を組んだ。「ウイユ アッセ ド ミュージック (左様音楽は十分ですわ)」とバンシンも快活に云つて、直に愉快さうな、氣輕な、フランス語の喋舌を始めた、その流暢な、敏捷な言句を聞き入つて居たマリヤ・デミトリエヅナは「すつかりバリーの上流社會のやうだ」と思つた。バンシンは心底からの満足を得たやうな氣になり、眼を輝かせ、顔をニコつかせた。初め彼は手で顔を撫で廻したり、額に皺をよせたり、視線がマリヤ・デミト

リエヅナと出遇ふ度に發作的な溜息を吐いたりしが、終には最うすつかり相手なことを忘れてしまつて、たゞ偏に半ば世間的な半ば藝術的な無駄話の面白さに夢中になつてしまつた。ワルワラ・バーヴロヅナは又立派な哲學者である事を示した彼女は何事に對しても即座に答へ、少しの躊躇も少しの疑問もなかつた。彼女がこれまでにあらゆる種類の才人と交つて來た事が誰の眼にも解つた。凡ての彼女の思想、凡ての彼女の感情はバリーのあらゆる方面に亘つて居た。バンシンは話題を文學の上に轉じた。彼と同じくワルワラ・バーヴロヅナも主としてフランスの物ばかりを讀んで居るらしい。ジョージ・サンは彼女を憤激させ、バルザックは尊敬はして居たが徒に倦怠を感じさせられるばかりであつた。シユーとスクリイプには人間を知る事の偉大なるものあるを認め、ヂエーマとフェーバルとは共にひどく崇拜した。胸の底では彼女の最も好んだのはポール・ド・コックなのだが、これだけは流石に名をすら擧げなかつた。併し實際の所、文學は彼女に左程興

味あるものではなかつたのだ。ワルワラ・バーヴロヅナは少しでも自分の位地境遇を憶ひ起さすやうな話は巧に避けた。彼女の言葉には少しも戀だの愛だのに關したものがなかつた。寧ろ煩惱の誘惑に關しては、峻嚴な色を見せ、幻滅無交渉のやうな顔をした。パンシンが論じかけると、彼女はなかく／＼それには同意せず
に戰つた……だが妙なことには……相手責める言葉、時としては随分ひどい言葉が彼女の唇を洩れたにも拘らず、いつもそれらの言葉には優しい、情の籠つた響がつき纏ひ、且眼が常に何事かを語つた……あの可愛い眼が何を語つたかは明かに云ふ事は出来ぬが、少なくともその中には嚴肅ならぬ何物かあつて、限りなき妙味をそのうちに湛へて居た。

パンシンはその秘れたる意味を解かうとし、どうかして自分の眼にも何か語らせやうとしたが、併し結局無効のやうな氣がした。彼は外國から來た眞個の傑物たる性質から、ワルワラ・バーヴロヅナが遙に自分などより高い所に取り澄まして

居る事を知つて居るので、自分で自分を思ふやうに振舞せる事が出来なかつた。ワルワラ・バーヴロヅナは人と話をして居る間に相手の袖に時々軽く觸る癖があるので、その時々接觸が今やウラヂーミル・ニコライイチの心をひどく亂したのであつた。ワルワラ・バーヴロヅナは一體誰にでも造作なく取入る能力を持つて居たので、僅二時間ばかりのうちにパンシンは最う一時代の経過したやうな氣がして、リーザ……とに角自分から惚れてつひ昨夜婚約まで申込んだその同じリーザが、何だか最う霧の奥へでも没し去つたやうに覺えた。やがて茶が運ばれ、話は一層自由に隔なくなつた。マリヤ・デミトリエヅナはベルを鳴らして召使を呼び、頭の工合が良かったらリーザに階下へ來るやうに云へと命じた。パンシンはリーザと云ふ名を耳にすると等しく、献身的と云ふ事を論じ出し、男と女と何らが多く他人の爲めに自分の身を捨て得るか云ふ問題に論及した。マリヤ・デミトリエヅナは見る間に熱して、女の方がさうだと云ふ事を論じ出し、その事實

なら數語で立證し得るとまで主張し、その數語にまごついた揚句は、却つて自分の方に不利な比較まで持ち出して論を結んだ。ワルワラ・バーヴロヅナは樂譜を取り上げ、その蔭に半ば身を隠すやうにして、パンシンの方へ身を屈め、ビスケットを噛りながら、口元と眼元にうららかな微笑を浮べて「エル ナ パ アン ペンテ ラ ブードル、ラ ボンヌ ダーム」(女は火藥を發見せざり)と小聲で呟いた。パンシンは一寸びつくりした。ワルワラ・バーヴロヅナの無作法は實に驚くの外はないのだ。だが此の思ひがけない突撃の中に包まれた自分に對する侮蔑の如何ばかりなるかは彼には解らなかつたのだ。でマリヤ・デミトリエヅナの自分に對する親切も愛着も何も忘れ、今迄に自分の爲めに御馳走をして呉れた事も、金を貸して呉れた事も忘れてしまつて、彼は(馬鹿な奴だ!)同じ笑顔、同じ調子で「ジエ クロア ビヤン」(左様)と答へた。而も「ジエ クロア ビヤン」と明かに發音する事さへせず、「ジエ クロア ベン」と云ふ言ひ方をした。

ワルワラ・バーヴロヅナは懐しげな眼付を彼に送つて、立ち上つた。と、リーザが入つて來た、マルファ・チモフェーヅナが留めるのも聞かずに、行く所まで自分の苦しみを言かさうと覺悟してやつて來たのだ。ワルワラ・バーヴロヅナはパンシンと共に立つてリーザを迎へた。パンシンの顔にはやはり以前と同じやうな外交的な表情が現れた。

「如何ですか」と彼は訊ねた。

「有難うございます。最う餘程よろしいのです。」とリーザは答へた。

「先刻少しばかり音楽をやりましたよ。貴女にワルワラ・バーヴロヅナさんのを御聞かせ申さなかつたのは、實に惜しい事でした。此の方の歌は眞實すばらしいもんです。アン アルティスト コンソンメー(藝術家だ)」

「此方へゐらつしやいましたよ。」とマリヤ・デミトリエヅナの聲がワルワラ・バーヴロヅナを呼んだ。

と、直にフルワラ・バーヴロヅナは、子供のやうに素直にその方へ行つて、マリヤ・デミトリエヅナが斯うやつて呼んだのは、娘をせめて一寸の間でも好いから、パンシント、二人限で置きたかつたので、今になつてもなほ心の奥ではリーザが思ひ直してくれるやうに望んで居るのだ。のみならず或る一つの考が今や彼女の頭に入り込んだので、それをどうかしても早く外へ出してしまひたかつたのだ。

『お解りでもありませんか』と彼女はフルワラ・バーヴロヅナに呟やいて『妾の貴女方御夫婦の間を御仲裁いたさうかと存じて居ますの。うまく参るかどうかは申せませんが、とに角出来ませうだけ骨を折つて見やうかと思ひます。彼人は、御承知でもありませんか、大變妾を重んじてくれて居るししますから』フルワラ・バーヴロヅナは徐ろに眼を上げてマリヤ・デミトリエヅナを見てしとやかに手を握り合せた。

『貴女は眞實妾の救主ですわ。マタンテ（をばさん）』と悲しげな聲で彼女は云つた。『妾どう御禮を申してよいか分かりません。ですけれどフェードル・イワニチの方へ對しては、妾の罪は餘深過ぎるのですもの。とても妾赦しては貰へないでせうよ』

『ですが、貴女は！眞實に！』とマリヤ・デミトリエヅナが問ひ訊すやうに云ひかけると

『もう訊ねてくださいな』とフルワラ・バーヴロヅナは抑へて眼を俯け『妾が若くて、うかくして居たからなんです。ですけれど最う妾自身の事は辯解いたしたくはありません』

『それはまあさうでせうが、何故辯解なさいませんの。何も諦めてお終ひなさる事はありませんわ』とマリヤ・デミトリエヅナは答へて、將に相手の頬を撫でやうとまでしたが、ちらとその顔を見ただけで、さうする勇氣は出さずに止めた。

「此女はまア何てしほらしいんだらう。でも矢張傑物は傑物だ」と心の中では思つた。

それと時を同じくして、一方では

「どこか御身體の工合でも悪いんですか」とバンシンがリーザに云つた。

「えい、どうも良くございませんの」

「解つた」と彼はわざと永く口を噤んで居た後で云つた。『さうです、よく解りました』

「如何いふ事ですの？」

「私には解りましたよ」とバンシンは意味ありげに繰り返したものの、實は彼は何を云つて好いか解らなかつたのだ。

リーザはもどかしく思つたが、やがて何だつて好いわと云ふ氣になつた。バンシンは不思議な様子をし、鹿爪らしい顔をして外方を見ながら、ちつと口を噤んだ。

だ。

「十一時は打つたやうに思ひますが、」とマリヤ・デミトリエヴナが云つた。

客はそれに暗示されて、挨拶をしかけた。ワルワラ・バーヴロヴナは仕方なく明日又正餐に御馳走になりに来る事、それからアダを今度連れて来ると云ふ事を約した。隅の方でぐつすり眠り込んで居たゲデオノヴスキーは、ワルワラ・バーヴロヴナを家まで送つて行かうと申し出た。バンシンは嚴然たる態度で一同に別を告げたが、出口の所でワルワラ・バーヴロヴナを助けて馬車に乗せてやつてから、女の手を握つて、馬車の後から「オウ ルポール！」(さよならまた)と呼んだ。ゲデオノヴスキーはずつとワルワラ・バーヴロヴナの側に腰掛けて家まで送り届けた。ワルワラはいかにも偶然らしく自分の小さい足で老人の足先を壓しては窃に面白がつて居た。老人は大まごつきにまごついて、頻に何か御世辭らしい事を云ひ出した。街燈の明りが馬車の中へ射し込むと、ワルワラはクツ

く笑つてゲデオノーヴスキの顔を秋波で見た。カリーチン家の客間で弾いた曲が頭の中で鳴つて居て、妙に彼女を興奮させた。どんな場合でも彼女は燈火の流れと、舞踏室と、音楽につれて動く人の渦とを想像しない譯には行かなかつた——かくて彼女の血は燃え立ち、眼は異しく輝き、微笑は唇の周圍に漂ひ、バツカスの神の恵のやうな酔心地が彼女の全身に漲るのであつた。家まで來るとワルフラ・パーヴロヅナは、馬車から跳ねるが如く飛び下りた——眞實の雌獅子（えら物）なればこそ其のやうに跳ね返る術も知つて居るのだ——と、ゲデオノーヴスキの方を振り返つて、突然顔の相格を崩してからく笑つた。

「愛嬌のある女だ」と自分の住居——石鹼捺劑を備へて召使が待つて居る自分の住居へ歸る道すがら、かの老議員は思つた。「俺は堅固した人間だからまだ好かつたが——それにしても彼女が何をあんなに笑つたんだらう」

マルファ・チモフエーヅナは其の晩は夜中リーザの床の傍について居た。

四十一

ラヴレツキーはワシリエヴスコで一日半を過したが、その間殆んど近所をうろつき通しにして居た。彼は一所に永く留まる事が出來ず、苦悶に嚙まれ、無力な而も烈しい衝動に絶間なく引き撈られた。彼は初めて此の田舎へ着いた其の日に覺えた感情を憶ひ出した。彼は又その當時に立てた自分の計畫を憶ひ出して、すく烈しく今の自分を苦しめた。自分の天職として、將來に於ける自分の一大事業として認めて居た事から、何物か能く自分を引き離し得たか。あゝ幸福の渴望——又しても同じ幸福の渴望！

『ミハレーウイチの云つた事が道理であつたらしい』かう彼は思つた『汝は再び生の幸福を味はうと欲したのだ』かう彼は自分に云つた。『せめて一度でも幸福が人間に來るやうな事があるなら、それは贅澤なのだ、不當の恵なのだ』と云ふ事

を、汝は忘れて居た。不十分だ、不純粹だと汝は云ふが、それならば充分な、純粹な幸福に對して汝の權利のある所を實現して見ろ。周圍を見廻して見るが好い誰か幸福な者があるか。誰か生活を享樂して居るものがあるか。草刈に行く百姓を見ろ、彼は果して自分の生活に満足して居るか……何？ 汝は彼と位地を變へて見たいと云ふんだな？ 汝の母は如何であつた？ それを憶ひ出して見ろ。人生に對して彼女の求めたものはあのやうに限なく小さかつたぢやないか。彼女の受けた運命がどんなものだつたかを見るが好い。汝の偉さうに見えたのはパンシに向つて俺はロシアの地を耕しに歸つて來たのだと云つた時だけぢやないか。あんなに云つて置きながら何だ。汝はそんな好い年をして若い少女の後を追ひ廻すために歸つて來たのぢやないか。自分の身の自由になる報知を受取るや否や、汝は何もかも打捨て、しまつた、何もかも忘れてしまつた。そして蝶を追驅る子供、のやうに汝は驅け出したぢやないか……』

このやうな沈思の最中にもリーザの面影は絶えず現れた。そのリーザの面影とそれから今一つの漂ふ面影と、更に他の幾つかの毒々しい、美しい、憎い顔——彼は努めてそれ等の面影を追ひ拂つた。アントン爺は主人のたゞならぬのを見て取つて、戸の外で數度、戸口で數度溜息を吐いた揚句に、いよく覺悟を決めて主人の傍へ行つて、何か熱い飲料でも召上るやうにと勧めた。ラヴレッキは嘔鳴りつけて出て行くと云つた。さうかと思ふと今度は勘辨してくれと頼んだ。しかしアントンにはたゞ益々悲しさが増すだけであつた。ラヴレッキは客間には居溜らなくなつた。何だか大祖父アンドレーが畫面の中から此の弱い子孫を嘲る如く見て居るやうな氣がしてならなかつたのだ。

「馬鹿！ 淺瀬に泳ぐやうな意氣地なしで如何するんだ！」かう彼の歪んだ唇が云ふやうに思はれた。

『こんな事はどうなる』とラヴレッキは考へ込んだ。『自分で自分を制する事が

出来ないとは何事だ。こんな……こんな下らない事に一生懸命になるなんて何事だ。』(戦場で重傷を負うた者は定つて自分の傷を「何でもない」と云ふ。人間は自分を欺かないでは、此世には生きて行けないものなのだ)ラヴレッキーは更に考へつゞけた。『俺はまだ眞實は子供なかの知らん。なに、構ふもんか、直そこに殆んど手の中に、俺は今一生の幸福の鍵を得かゝつて居るんだ。まるで富籤だ。一寸車を廻せば、乞食も金持になれるんだ。出ないなら、それまでだ——萬事休するわけだ。全力を盡してやつて見やう。そしてぐづぐづ云ふまい。うまく行くだらうて。何しろ命がけの仕事は俺も初めてではないんだから。だが、俺は何故逃げ出して来たのか、何故こんなに駝鳥が藪の中へ頭を突込むやうな風にこんな所でぐづぐづして居るのか。難關に衝突するのが怖いのか……馬鹿な！ おいアントン』と急に彼は大きな聲で呼んで『直に馬車の用意をさしてくれ。さうだ』と彼は又しても考へた。『俺はぐづぐづ云はずに我慢せにやならん。何でも秘に自ら事

を處せにやならん』

こんな風に理窟をつけてラヴレッキーは自分の苦痛を和めやうとした。併し苦痛は深く且強かつた。年の加減で感情も思考力もなくなつたアブラクシヤまでが、彼の市へ行くのに馬車に乗つた時は、悲しさうに見送つた位であつた。馬は駆け出した。ラヴレッキーは身體を眞直に起して、身動もせずに車の上に坐り、ちつと行く手の道を眺めた。

四十二

その前日リーザはラヴレッキーへ手紙を出して、晩に来てくれるやうに云つてやつたのだが、ラヴレッキーは自分の家の方へ先に行つた。家には妻も子供も居なかつた。召使共に聞くと妻は子供を連れてカリーチン家へ行つて居るとの事であつた。此を聞いて彼は氣も狂はんばかりに驚いた。『彼女は俺の命まで取つてしま

ふ覺悟なんだな」惡しみのあまりに彼はそんなにまで思つた。彼は彼方此方と室内を歩き出した。手足の觸れるにまかせて彼は絶え間もなく子供の玩具や本や女の道具を叩きつけた。その揚句にジャスチンを呼んで、散らばつた「ごみ屑」を掃き捨てると命じた。「ウイー モツシユー」(はいました)と彼女は顔をしかめながら云つて部屋をかたづけ出した。しとやかに身を屈め、一舉一動にいかにもラヴレツキを未開の人間かなどのやうに思つて居るらしい風を見せた。ラヴレツキは抑へ難い嫌惡の情を抱きながら、色香は失せて居るが、まだどこかに「ぴり」とした所のある、皮肉な、巴里子式な彼女の顔や、白い袖や、絹のエブロンや小さな輕さうな帽子を眺めた。と、つひに女を部屋から去らせて、(ワルワラ・バ一ヴロヅナがまだ歸つて來なかつたので) やゝ暫く躊躇して居た後で彼は思ひ切つてカリイチン家へ行く事にした——が、マリヤ・デミトリエヅナには遇はずにマルファ・チモフェエヅナの所へ行つた。(彼にはマリヤ・デミトリエヅナの居る

客間へはどうしても入る氣がしなかつた。客間には自分の妻が居たのだ) 彼は召使共の道になつて居る裏梯子を行けば眞直にマルファ・チモフェエヅナの部屋へ行ける事を思ひ出して、その計畫通りにやつた。運好く、庭でシユーロチカに遇つた。シユーロチカは直に彼をマルファ・チモフェエヅナの所へ連れて行つてくれた。行つて見るとマルファ・チモフェエヅナは日頃と違つて一人限で居た。帽子を被らずに隅の方に坐つて、身體を屈め、手を胸に組んで居た。ラヴレツキを見ると老婦人はひどく驚いて、慌てゝ立ち上り、帽子を探しでもするやうに部屋の中を彼方此方動き廻つた。

『あら、お前さんだつたねえ』と彼女は口を切り、彼方此方歩きながら、相手の眼を避けるやうにして『まア、今日は。だがねえ、お前さんは一體どうすると云ふの。昨日は何處へ行つて居たのです。まアねえ、彼女は來て居るんだよ。ほら、階下に。併しまア——どの道お前さんも』

ラヴレッキは椅子に身を落した。

『まあ、お掛け、お掛け』と老婦人は言葉をつづける。『ずっと二階へ来たの。尤も彼方はねえ。それで……お前さん妾に遇ひに来てくれたのだね。有難い事ねえ』

老婦人は暫く口を噤んだ。ラヴレッキは何とか云ひたいが、如何云つて好い加解らなかつた。でも老婦人の方でもそれを呑み込んでくれて

『リーザはねえ……さう、リーザは今しがたまで此處に居たんだけれど』とマルファ・チモフエーヅナは網籠の房を結んだり解いたりしながら『彼女は身體の工合があまり好くないやうなの。シューロチカ、お前さんは何處に居たの。此處へお出よ。どうしてお前さんはさうちつと坐つて居れないんだらうね。妾も頭痛がして仕様がないの。きつと歌と音楽に當てられたんだよ』

『どんな歌ですの、叔母さん』

『え？お前さんは知らないの。ね、あの通り最う先刻からやり通しなの——あの何とか云つたねえ——さう——二部合唱とか云ふのをさ。それもイタリー語で、チ、とかチャ〜とか、まるで鵲でも囀るやうに、長く引きすつたあの調子は、まるで最う殺されでもするやうに苦しいんだもの。あれはパンシンと、それからお前さん所のだよ。何でも直に最うあんな風になつたの。まるで親類同志のやうに、禮儀も何もあつたもんぢやない。だがねえ、犬でさへ自分の家を求めると云ふ事があるのだから、人に追ひ出されない間はどうか斯うにかしてのたれ死するやうな事もないもんだらうよ』

『ですけど、全く僕は意外だつたのですよ』とラヴレッキは答へて『こんな事をするのは、餘程鐵面皮な者でなければだめですね』

『いゝえ、お前さん、そりや鐵面皮ぢやなくて、立派に算盤を立てた上の仕事さね。それも悪くはなからうさ。だがお前さんは彼女をラヴレッキの方へ遣つて

しまふと云ふ噂だが、そりや眞實かえ』

『さうです。僕は最う彼方の方の財産は彼女にやつてしまはうと思ふんです』

『彼女が金を呉れろと云ふの』

『まだ云ひ出しはしません』

『いづれ遠からず云ひ出す事だらうねえ。それはさうと妾お前さんの顔を今やつと見たんだが、別に變りはないのだらうね』

『え』

『シユーロチカ！』とマルファ・チモフエーヴナは突然呼んで『駈つて行つてリーザさんに云つて頂戴よ——せめてね、否、訊いて見て頂戴……彼女が階下に居るのだらう』

『え』

『では、ね、妾の本を何處に置いたのか訊いて見ておくれな。彼娘が知つて居る

だらうから』

『かしこまりました』

老婦人は又してもごそ／＼騒ぎ出し、箱の抽斗を開け始めた。ラヴレツキーはちつと坐つたまゝ身動もしないで居た。

と、俄に軽い足音が階子段で聞えたかと思ふと、リーザが入つて來た。

ラヴレツキーは起ち上つて、頭を下げた。リーザは戸口で立留まつた。

『リーザ、ねえ、リーザ』とマルファ・チモフエーヴナはあわてゝ口を切つて

『妾の本は何處にあるの。お前さんは何處へやつたの』

『何の本ですの、叔母さん』

『まア、此娘は、あの本だよ。だけど妾お前さんに來て貰はなくとも好かんのだよ。それはさうと、お前さん階下で何をして居たの。此の通りフェードル・イワニチが來たんだよ。頭はどうなの』

『何ともありません』

『お前さんはいつでも何ともない〜とお云ひだけれど。それで、階下でどんな事をして居たの——音楽?』

『いゝえ——骨牌をして居らつしやるのですわ』

『さうだらう、彼女は何でも御座れなだからね。シユーロチカ、お前さんはお庭へ飛び出したのでせう——御出よ』

『いゝえ、貴女』

『構はないから、行きたいのなら、お出よ。ナスターシャ・カールボヅナが獨ぼつちで庭へ行つて居るんだから、お前さん行つて仲間になつておやり。だが年寄は大事にしなければなりませんよ。』——シユーロチカは出て行つた——『それにしても妾の帽子は何處にあるのだらう。何處へやつてしまつたか知ら。』

『妾探しませうよ』とリーザは云つた。

『お掛け、お掛け。妾まだ足を動かす用があるのだよ。帽子は寢室にあるに違ないから』

かう云つてラヴレツキーの方を横目で見て、マルファ・チモフエーヅナは出て行つた。出る時には戸を開放しに行つたが、直に戻つて来て閉めて行つた。

リーザは椅子に背をもたて、静に両手で顔を蔽うた。ラヴレツキーはもとのまゝに坐つて居た。

『こんなにして遇はなくちやならんやうになつてしまつたんですね』と彼は漸く口を開いた。

リーザは顔から手を離して

『え〜』と微に云つて『直にもう妾達は罰が當つたんですのねえ』

『罰』とラヴレツキーは云つて『何の罰です』

リーザは眼を上げて彼を見た。その眼には悲みの色も、不安の色もなく、いつ

もよりは小さくて曇つて居るやうに見えた。顔は蒼白く、心持離れた唇も亦蒼白かつた。

ラヴレッキーの胸は可憐さと可愛さに打ち震うた。

『お手紙には何事も最うだめだとありましたね』と彼は小聲で云つて『さうです何事もだめです——まだ始まらない間はね』

『何もかも忘れてしまはなければなりませんわ』とリーザは云つて『貴方に来て頂いて妾ほんとに嬉しく思ひますの。實は手紙でと思つて居ましたのですけれど、彌張御目にかゝつた方が好いのですわ。何しろこの短い時間のうちに出来るだけの事を致さねばなりません。妾達は二人共今義務を果さなければなりませんのですわ。ねえ、フェードル・イワーニチさん、どうぞ奥様と元運になつて頂戴な』

『リーザさん』

『御願ですからさうして下さいます。それだけですわ——妾達が今度の事の罪』

を償ふ事の出来たのは、どうぞ其を御考へくださつて、妾の申す事をかなへさせて下さいますし』

『リーザさん、まア何と云ふんでせう——貴女は出来ない事を僕に求めるんですね。そりや最う貴女の被仰る事なら僕は何でもするに躊躇しません。ですが今になつて彼女とも通りになるやうな事がどうして！……僕は最うどんな事でも承知します。何事も忘れてしまひます。ですが自分の情を強ひる事だけは出来ません……眞實そりや残酷ですよ』

『出来ない事まで御願いたすのではありません。御出来にならないならば、何も御一緒に御暮しなさらなくてもよろしうございますけれど、でも御和睦だけはなすつて下さいまし』とリーザは答へて、又しても手で眼を蔽うた——『あの御娘さんの事を思つて上げて下さい。どうぞ妾の爲と思召して』

『解りました』とラヴレッキーは口の内で云つて『さうしませう。多分それで僕』